わるま上

二十

哥と詞と名ごとわ

[v.34]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 34
copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

（源氏卅九より四十一才の事まで也）
朱雀院のれ門おりしミゆきの後まころほひより
例ならずなやミつゝを給もとよりあげしく
おりしますうちに此さびは抱ころばそくおぼし
めされて年比もとこるひのほいふきを（無拍のまゝ也）ささい乃
家のおりしましつゝほどはよろづまぐうりきて
さきのていまゝでおぼしさぐこほりけるをおる紙
そのるゝまもよほせまやあらん世るひさしかう
まじき心ちなんすうなどの給はせて さるべきれ心
まうけどもをさせ給ふれ子こちは無家をさ
こてまつりて女家こちなん四所（よところ）おりしましけるを
中に（女三ノ母之源氏家と申之）殿つぼときこししは先帝（せんぐい）の源氏まぞ

おりしましけり。まゝ坊（朱雀ノ）とこそしさせしとき
まいりなて。女（拓もとのまゝ）うきくらねまもさゝまりなべりし
ひとれ。とりこそうれうしろこもおりきぞ。さく
ゝこもそのすぢとなく。抱きうるき更衣（ふ）ぞうこそて
抱し給ければ。れまじらひのほども心ぼそげまて。
大（私）后の内侍（勝月）のうこをまいりきこそまつりなて。かゝ
いらまるしぶ人なくもてなし罪し給などさし程に。
けせされて（源氏宮ノ）。こうど（朱雀）も此心の中に。いとおしさ
もれにいふこそしさを給なるがし。おりねさを給ひし
うぼ。かひなくくちおしくて。世中をうらこそうな
やうまてうを（源氏宮）給ひし。そうれとしの女三宮とおまるの

れ中にまぐれてかなしきものにしひかしげき
きこし給。そのほどれとし十三四ぢりにかす。いま
いとそむきすて。やまごもりしなん後の世にふち
とまりてふれを女のむかげにて拘し給ちんと
すらんとふぐこのれことをうしろめたくおぼし
なげく。西山なりれてらつくりもてく。うけろちを
給りんほどのれいそぎをきさせぬふにそへて。まる
この女三のれもぎのことをおぼしいそがせ給。院乃
うちにやむごとなくおぼしてれたらし拘れでうどだ
をばさしにもいたず。ちかなきれあそびものまで。
すらしゆへあかうぎりをば。女ぐこのれかたりと

けらしとてまつらをなて。そのうぎくをなん。と
こゝこちにはれそうぶむどもありけり。長安を
うられなやうにそへて。朱ノ紙そむうをこまつべき。
れこゝろづかひりなんとこうをなて。けらしら翁
なへり。もし 女れ 兼香殿 もそひこゝろさをなて。まいり給
へり。すぐれこうれなげしましもあらざりしうど。
長安 家のうくておりしまけれすくをのうぎりなくめで
こければ。朱ノ どしどろのれ物紙こまやうにこゝろしうを
さき給へり。長安 家にもよろげのこと。よをこもち給へん
れ心づかひなどこゝろしきし翁給。長安ノ れこしのほどよ
ほしいとよくおとなびさをなて。れうしろこだも

ふるきゝるきかくしりぬあるしひとりもあけ
しふまんべうとうちろやすくせゝゝさも絶。条詞 此
世をうしとのゝしるとも絶ず。女家ゝのおもく
のこりすくなきもこゝろをおもひやるなん。さしぬま
これにも限りありめべかりけり。さゝくひとみ
うへにこゝろしにも。女はこゝろかはりやすきあめゝ
あはれしく人はおとしめらるゝすくをおろかなれ。
いと口おしくなしさ。いづれをもさやうなれ
孟文ノ 此世には。さ隔てつけて。此心とゞめてあはし
ふかくよ。その中にもうちとけずあはつし。さうなる
まもさゆづり給ふ。女三 三家なんぞけるにもとひみて

（源氏文ニ世語ヲ来雀ひとりとも）
こゝひとりをこれもしき物とおもひて、うちすて
てん後のよ。こゝよひさすらへんこと、いとゞうし
ろめたくかなしく侍と、れめをしのごひつゝきえ
しらせ給。（兼香取）女れまもころうけてしき後まこさえ
つげさを給。（地）されどもく女れの（源氏文）人よりはまさるを
ときめき給しまゝ。これいどゝかつし給しほど、れ
なかしひども。えうちしかしざりしかば、そ志
なぐりまて、げまいまはわざとまくしといなくとも。
まことに心とゞめて、さひうしろえんとまでいおば
さずもやとぞ。をしとうしかしかし。（朱ノ）おさゆふり
（女三ノ巻）このれことを見しなげく。さしくれゆくまくま

れなやこまことをもくなりまさしをなて、こ寸の
とまもいでさ留給ひず、れもおくけまて、とさぐ
なやまを給こともありつれど、いとかくうちとへを
やこなさ女にはおりしまさぐ里つるを、ひこびは
なぬかぐりなりと見しめしたり、れくらねをさら
せたまへれど、なをその世なりこれこそめたて
まつりなへる人ぐは、いまもなつしくめでたされ
ありさ女を心やすと所にまいりつるまいり里給ひ
ぐりは心をひくしておしこさてなふ。六条院
よりもれとふらひしぐくありこげからもまいり
たまふべきよし男召て院（朱心）はいといたくよろこび

ましゝ。さき給。中納言(夕)のきこえまつりたまへるを。こゝす乃(朱ノ)
うちゐめしいれて。ものがたりこまやかなり。なに(朱雀)
院のうへ(桐ツボノ帝)のいまはのきざみは。おほせる遺言(ゆいごん)あ
まし。中まこの院(源)の御こと。いまれうち(冷)の御こと
らん。さりはきこえてのたまひおきしを。おほやけ(朱ノ御位ノ事)と
なりて。ことざまありけれども。わたくしの心ざしは
かはらずなるべし。ちゝみかど(朧月夜ノ事)のあやまりに。こゝろ(注コ)
されそまつることもありえんとせずなきを。さしげ
ことなかれてそのことのみなへるかしこき御
あんもしの夜ぬ。さしきへといへども。これ
まへまかりぬればこそさいひて心うごきうまさるぞ

そのむろひとへゆかめることあらんつかしへぶらり
物はかりけるかいかなんおりはかぞのれころだん
ほころぶべからんと世人もをもむけるをひけるをつね
まえのびきぐしめて世家なかさまも心をつをを冥
おかいまちくまつておくえてしかるべき中とあり。
むつびえてしおんへるもかぞうあってころうは　おもひ
おかしなどのさろかあつはそへてこのそのやこうは
一　立まじきもの（朱ノ昇下之）かくおしかさ夜まやとて中（表でありくる）くしよその
こしは冥しきあちこうさ夜まて待か肉（冷）のれことえ
（相つぎ帯）扨れ送（ゆいぞん）きかべずつてまり無てしかばかく
すゑのかれおさしけさ状さしてないことを

おもてぶきをもおうし給ほいのごといとうれしくおん
このあきのぞ葉の後いましへのことゝりそへて
ゆしく笑つゝなくおんおぼしぬふこゝめんは四方
べきことゞも侍りかゝるぞ三げ(涼)かしとふこゝひもの
しこまふべきこゝしもまほしやしぬへなどうち
志ほこれつゝの給ひ寸中納(夕詞)云の君すぎ侍りはなん
うさはどをかくもおもふこまへ口きがたく侍りさし
まかりへ侍て おほやけまもつゝうまつり侍あいだ
世中のことをこゝこまへまかりありくほどはいたふの
ことはつけてもうちくのさるべき物がたりなどの
行いてまもいましへのうれりしきことありておん

おどうちうすめやさるくおりも待しぞなん。うく
おほやけのれうしろゑをつうまつりさして。しげ
うまうしひをうまへんと。ひとへにこもるもねし
のちはおまごとをもしらぬやうにて。右院(桐つかゝ)のれ遺云(ゆいごん)の
こともえつうまつらず。れ位(朱ノ名ね)におもしましく世
まは。よもひのほども。身のうつ鞆もをこまぞず。うし
ろきかこの人々おほくて。その心ざしをとげて。れ
らんぞこゝろくこともなりき。今(朱ノ)うくまつりごと紙
さりて。しげうまおりします比ほひ。心(源ノ)のうちをも隔(へだて)
なく。まいりうけ南りしまほしきを。さすがうり
なまとなく所をさ身のよそほひにて。をのげうし

月日をすぐしてことくなん。おりくなげきや給
など羹(そう)し給。二十(タリ地)(たさち)はもまぐるけいなるほどなれど。
いとよくとのひすぐして。うちもうちまに
ほひて。いとじくさよくなるを。此(糸ノ)めはとゞめて。
うちまもしを給つ。これもてつづしを給姫(女三)宮の。
此うしろこはこれをやなど。ひとしれぞ思
よるもなる

朱訂 おほきおとゞのつくりて。いまはすゑ[タノ]けれ
こりとれ。さしごろ心えぬさ夜にきくしが。いと
おしうしを。こゝやすき抽かゝさすがにねたく
ちふことこそあれと。の給ひ寄れかしきを。いかに[タム]
の給ひすることまうと。おやしくちひめぐらすに。
山ひめ[如三]やをうく笑しあつかひて。さらべきひと
あらばあづけて。こゝろやすく世をもおもひたまれ
ぢやとなん。笑しの給ひすると。をれげからもり
きゝぬふこゝろありければ。さやうのすぢにやとは
ちひよれど。おとこゝろえがれにも何かはいへ
きうしさもん。訂 こゝもかぐしくも待ちぬ君なりは

よろべもさゝめしひがくのこゝろんとぞりぞうしして
やこぬ。女房などはのぞきてこ写して。いとも疑(ぐ)くも
こゝ給(タ)かくこちこういかれ。おなめでこゝなどあつまりて
写ゆりを。おいしこゝ人るは。いでさりとも。かれ院(源)のかぜ
りまおもきしれありさ風まは。えなずゝ人写し
給はざめり。いとめもあやまこそきよこゝまれし給
しかれと。いひしろふをさ(朱ノ)うしめして。まことま(詞)
かれ(源ノ)はいとさ風こゝとまりし人ぞかし。いまはまる
ちよまもねびまさりて。ひかりとはこれをいふべき
まやとこゆりまほひなん。いとゞくもゝ里まるなか。
うりしぐちてもかぐしきかるりこれぞ。

いけらしくあざやかまめもとうぢぬ心ちすりを。又
うちとけてこそふれごとをもいひこぶれあそんだ。
そのこゝまつけていまゝ抱なくあいぎやうけさ
なつしくうつしきことのなしびなきとそよ
ありがこそれなまごとまもさされよをしまゝれて
めづらかなる人のあ猶なり。家のうちにをひ出て。
捆つかゝ帝
ていまうのかぎりなくかなしき抱ましのひ。さは
かりなでかしづき。身にかへて覚しかりしかど
心のまゝにまもをごらずひがして。女がうちには鈎云
にもならず女にまうしびとつあまりてや。宰相にて
大将かけのへりかん。それにこれもいとこゝになく

すこゝろをめるはづざくのこのおぼしのまさ家か
めりうしまことにうしこうさうるのぎえ心もちゐ
ねどはこれもおさくをとるまじくおやまりても
およすけまさりうるおぼしいとことなめりなど
めでさを給ひ女三めこやのいとうけうしげまて。つゝく
なる心なきは宿様なるなを来ノこそまつり給にも。見河
もやしまりかけはまるうるおひなんことなれ。
そうくしをしへ置しけべうんひとのうしろやを
うんにおづけきこしどやなど置し給をとなしき
はめれとゞもめしまて。女三ノはもぎの程のことなどの給
もすつゝでに六条のおとゞの或人のこゝて出

むすめ。おなしさてなんやうに。このこやをあげ
りてもぐらまん人もがれ。ぐ人のなりにはあるを
がうし。内には中ぐ女さふしひ給。川ぎくの女は達
とても。いとやんごとなきかぎりもれをしるしに。
もかぐしきうしろこなくて。さやうのまじらひ
いとなかくなしん。この猶中納言の親臣のひとり
ありつる程に。うちうすめてとそ心ふかべうりなれ。
ワクれどいとをやうさくに。おひさきこれもしげ
なる人にぞあめるをとの給ひす。中納言はもとより
いとまめびとにて。年比も坡ひたりに心をかけて
ほかに歯にもひうけろふべくも侍しぎりけるに。

そのせひかなひてハいとゞゆるぐかな給らじ。
かれ院(係)こそ中くる紙いかなるよつけても人を
ゆしくおぼしたる心ハ。さらぎもれをさせ給なれ。
その中にもやむごとなきれ孫がひふくて。兄
秋院(さいゆ)などをも。いまはりきれがらくこそきこえ給
なれとかしていて(朱訂)そのかりをぬあざけしそハいと
うきろめたかれとはの給はすれど。げ(地)にあまりたる(係ノ衆ノ名ヲ)乃
なるまかくづらひて。めざ(女三ノ)度しかるべきおもひも
ありともなをやがておやざ度にさぶめたるまて。
さもやゆづりをさ望ましなども見しめす
べし。まことにすうしもよづきてあらきんとせりん(朱訂)

女子もたらばおなじくはかれ人(係)のあたりにこそは
ふれぢくをまほしかれ。いくぢくならぬこのよれ
あひざは。さぞたり心ゆくありさ海にてこそ。すぐ
さ海ほしかれ。(朱)これ女ならばおなじたらからなり
ともかならずむつびよりなまし。つくまし時など
さるんおぼしまして女のあざむかれんは。いと
ことわりぞやとの給はせて。(地)れ心のうちに。(膠)かむの
恵のれことも見しまうべし。このれうしろこ
どもれなりに。をもくしきれめれとれをうと。
左中弁なり。かれ(係)院のきさきさき人にて。どしば
つくまつりたり。この(女三)やにも心よをことにて

さつらへば、まいりたるにあひて、抽従するにいでに。
うへなんしらくれ乳母をしてきこえ給しを、うれ
院におりあらば、もし罪さをぬへ、こそこちも
ひとりおりします。こそは、例のことなれど、さ海
ざ海につけて、こころよをこそまつり、何ぞ事つけ
ても、れうしろえし給人あるは、これもしげな里。
うへを並こそまつりて、まことまごろにせひ罪ぬべき
ひともなければ、をのれはつうまつるとても、なに
ぐらの女づへにかあらん、ワが心ひとつにしも
あらで、をのづらせひの邪のこともおりしまし。
かぐしき罪もあらんときには、いかさ海り

かはまづらりしかんれ。（半ノ）れらんずるよ。とをかくも
このれことさぶまりたらば。つうまつりよくなん
あるべきかしこさすぢときゝゐれど。そんなにいと
すくきさぶめがたくおりします抱なれば。よろげに
なげしくかくあまるのれ中に。（女三と）ちりつきたてて
さき給につけても。人のそねこあべかめるを。いかで
ちりもすへなしじとかたふに。（左中弁詞）弁いかなるべき
れことにかあらん。（係）院にあやしきまでれ心なげく。
かりにてもこそめなへる人にれこころとまりたる
をも。又さしもかからざりけるをもかたぐ
つけて弱ちりなひて。あまるに川どへ寄しなへれど。

やむごとなくおぼしたるはかぎりありて、ひとかた
なめれば、それにことよりて、かひなげなるすまゐ
ち給ふるぐこそはおぼゆるを、此すくをありて、
もしさやうにおりしますやうもあらばいこじき
人と男もとも、たちならびてなしたちぬふことは
えあらじとこそはをしたちたれど、猶いかゞとたゞから
なくことありてなんおぼゆる。さらは此よれさうへ、
恩の世にすぎて、身に心もとなきことはなき紙、
女のすぢにてなん、人のもどきをもおひ、けが心にも
あらぬこともあるとなん。つゐにうちくのすさひ
ごとにもおぼしの給ひするに、げにをのれらがこ

そてまつりにも。さるんおりします。うたぐり
つけて。れかげにくしぬへる人。これ（その）もう人ならず。
こちらぐれうきいにいもれし給ひ。どうぐりあり
こゝ人どもにて。院（源）のれありさ後にならふべき。そて
ゞしこうやいおこすめう。それにおなじくは。げに
（女三ノ）さもおりしまさバいかにさぐひこうれあもひな
らんとかたらふを。めれとまることのいいでに。
しかくなん。なにがし（めれと訶）（左中弁ぐうう）の朝臣にほのめかし給り
しかバ。かれ院（源）にいかるゝぞうけひき。さを給て
しばのれほいかるひておぼしぬべきこと
こゝるのれゆるしまことにありぬべくハ。

つくゑまえんとあんじゆをいたさんべきこと
まこれ給しん、ほどくはつけて、ひとかたならずお
ばしけるきまへつく。みだされ心ざ候よしみし給
あれど、うへさまとくつくひ、せうへいからあがりび
ふかことは、人のあかぬことよし給めかたき、免ざ候しき
ことまや給ふん、御うしろまのぞき給人ぐは、おまた
地志給めり、らく御ばしめしさぐめてこそよく給ふ。
ぬかぎりあるき人とおもゆれど、いまだ世々やうとては
これはかくはあるべくしく、世中をれ心とすぐ
あげべきもおりしますべきあかたを、ひめぎやいおさ
ましく御ばつかなく心許なくのたまいしさせ給ふ。

まふ人ぐハうまつりかざりこそそべつ絶お
きこの流心をきそはあらびきそ。さうしきは
志もべもちひきさつふこそ。そのりおうとまれ
侍らめ。ぞりそうつれうちろこゝもれしくまれは
ざらんハ紅うろぼそきハざはちるん侍らんべきしく
きこゆ。志つ（条羽）胡もひぬどろまよりちるん。ここうちの
よづきうろ有樣ハうしそおそくしきやうまも
ありまうたらきぬちといへどを。女ハおとこま心
引まつけてこそ。やしげあうこともめづあしき
そひもどれづうちまじ引をれちあれど。うけれ
からしくちひきざうなど。まるきるべきん入り立

とられて、これむかげどもは別ぬるのち、心をとそて
世中はすぐさんことも、昔は人の心多いしうりて、
よりはゆるさるまじき程のことをば、さひをとゞめ
抱とゐらひたりけん、いまれ世はすきぐしく、
えぐりがたしきことも、かいはふれてきゝ由めり
りし、昨日までこうきおやの家はあがめられ、うし
づれしひとれむすめれ、かふはる後くしくを
ざれるきはの、すき抱どもは狂こちあざむかれて、
なきおやのおもてをふを、かげをもづしむかる
がひおほく冥ゆる、いひもてゆけば、これおなじこと
なり、程くはつけて、すくをなどいふなることは、志なも

ぐさきワぎなれば、よろづにようしろめたくなん、せ
べてあしくもよくも、さるべき人のころ下りゆる
しをきこるまゝまて、世中をすぐすれ、すくせく
まて、後のよはおとろ人あるときも、こゝかしのあや
まちはいなしぎありへてこよなきさいえいあるを、
めやすきことはなるありいかくてしもあしからぬ
ぞりかりとこゝれど、なをこちまちはふとおきてつけ
こる程はおやはしられぞ、さるべき人もゆるさぬは
こゝろづくしの思ひワぎしいでこるなん、女の身はい
ますとなれきずとおぼゆるワぎなる、なをくしき
こゝ人のなりしひまてぞは、あたつけく心づきなき

ことなり。男づしの心よりはなれて。あるべきよも
あらぬを。おもふ心より得たる人にもこえすくをの
程さぞめられんなん。いとかろぐしく。男のもて
なしありさ海。をしたりしることなるを。あやしく
もれたるきころざ海にやとこ西見る所さ海
なるを。これかれの心にまかせてもてなしきゝ也。
さやうなることのよにもりいぞんこと。いとうき
ことなりなど。こすてこそまつり給いんのちのよ後
うしろめたげにしひ罪さをなへれず。いよく
まづしりしくしひあへり。いますこしもれなるも
しり給ほどまで。こすぐさんとこそはとしごろねん

じつるを。ふるきはいもとげずなりぬべき心ちの
するに。さひまはされてなん。かれ六条のおとゞ(源)は
げまさりともものこころえて。うしろやすきうるは
こよなりなんを。かるゞゝしあまるもれさる
べき人ぞを。しるべきまもあらずし。とてもかく
ても人の心からなり。のどかなおちゐて。おほかるの
よれさめしども。うしろやすきうるは。ならびなく抱
きらるゝ人なり。さしぞよろしかるべきひと。これ
ぢうりかはあらん。(鶯)芸人がらはめやすしかし。
おなじすぢまて。こと人とはきまへおとしむべき
よはあらねど。あまりいたくなよびよしめくほどに。

ともきゝるをとられて、すゝしゝろびゝるおぼしや
すゝえまゝらん。れさる人をいとゝれもしげなく
なんある。また大納言（泪ともなし 朱ノ別尚ヘ 女三ノ家司をのぞむをいふり）の親臣の家つゝさのぞむなる
さるゝるまもれまめやうなるべきことゝりはあれ
れど、さすがにいゝまぞや。さやうにをしなべゝる
きはくなをめざ面しくなんあるべき。むかしもう
やうなるゝらひまは、何ぞもも人にことなるおぼし
あるまことゝりてこそありそれ。ぞひとへにまゝる
なくもちゐんゝるだゝりをかしこきことゝにおもひ
さゞめんはいとあるぞくちおしゝるべきわざゝに
なん。太清（柏ゑりんのうこ）の志るにわぶなるよし。関（勝）侍（ノ）の物の

をこれし。その人(柏)ぞうりなん。らんねなど今すこし
抱めしきほどにまちりなが。などうはともしよりぬ
べき後。まぐさしいとつくむげにうろびこるほど
なりこうき心ぞしふくて。やもめずまてゐしつ。
いくしづまり。しあがれるくしき。ひとにいぬけて。
ざえなどもこともなく。つねにいよれうる。然と
なるべき人なれば。ゆくすゑもこれもしれど。なを又
このるめにとしひそそんにいかざりぞあるやと。
よろげにおぼしまづらひこりかやうにもおぼし
よしぬあ。実こちをばかけても罪なやましおふ
人もなし。あやしくうちくにの給ひすなれ。

めきごとくもれをのづからとひろごりて心を一
せ人ぞ御ほうりなり。御ほきおとくもこの(柏)勢の替乃。
今までひとりのこありて。こゝろちなくぞハえじ
とせんるを。かゝれさぶめどもいでさるなりは。
さやうにもをもむけてまつりて。めしよをられ
たん時。いかぞりつゞるめにもめんぼくありて。
うれしかんと思しの給て。(勝)関伯のんのさま
にハ。かれあ〇の(口云)小のるをしてつゝん戸給なりなり。
よろづかぎりなき云の葉をつくしてそうをさせ。
れかしき給ひしを給。(鶯)笹ゆゑ安ハ(ひげぶ)たちねの(むぐら)小のるを
ぬしらづしぬて。(むノ)きゝ給ふんさゝろもあり。かゝれ

あまんことゝとえりすぐし給ふ。いかゞ（女三ノ事）はれこゝろの
うごかざらん。限（クギリ）なくおぼしいたれり。夜大納言（諸ともあり 朱ノ別内ニ）は
年比院（朱）のべうにて。おとしくつかうまつりて。
まゐひなれまゐるを。れ（朱ノ）山ごもりし給なんのち。
より所なく心ぼそかるべきを。ひ宮（女三）のれうしろみ
ことゝをて。かへりこさをなべく。れかしきをちる
給かりなふなるべし。撞（タ）中納言も。かんことゞも。
きて給ふ人づてにもあらずさばかりをもむけさせ
なへりし。れ（朱ノ）かしきをこそまつりてしかばなの
つゝみぬよりにつけてもしきこしめさすす
ことゝもあらばよをもてなれてはあらじかしと心

ときめきもしけべれど、女ぞ(宮内)のいまはとうち
とけてこれこゝのへるをとしげつしきまもことづけ
けべりし程ぞ。ほかぎ海のころもなくてすぐし
てしを。おやまくにいまさしにこちかへり。まいかに
もれをやおもしを望べん。なれめるしぞ。やむごと
なきかるにかづしひなば。なまごともおもふまう
なしで。ひぐり右(ふぎ)にやすらぐ。けが身もくるしく
こそいおしめ。もとよりすきぐしかしぬ心なれば。
ちひしげめつてうちいでねど。さすがにほかぎ海に
さぶ(少三ノ)まりこて給いんもいかにぞやおぼして。こゝこ
とまりかり。妻ぞにもかうことぐもきこしめして。

さしあたりたるたびいまれことよりも。のちの世を
毎めしともなるべきことなるをよく覚しめし
めづらすべきことなり。人がらろしとても。さて
人いうぎりあるを。なをしかばしたることなるが。
彼六条院にこそおやざ海にゆづり罪しさを給い
めとなん。けざとれれをうそこそりいあらねど。れ
そしきありけるを。まちきりを給てもげにさることなり。いとよくおぼしの給いをたりと。いよいよれ
心ざしをなて。まづれ弁してぞ。何ぐあない
つゝへ罪しさを給けるこの家のれとよくおぼし
けづしふさ海いさ紀ぐもこれ罪をさきたまへれど。

こゝろぐるしきれともなきもあるなれ。されはあり
とも浣の此世のありすくなしとてそこまかる
りぐるしきらせられこそまつるべきことてかその此
うきうきのこしをかうけさり更しんげきさむいを
おやもうちぬまでいつまでもしのほどものそらとまう
うぎさりあしが。おほくをさつけていゝづれの此子ゝ
ちゝもごうそまことそうちそまいるべきまも
あはれど。ちちくさりわたそてことそまうち
んをばことをそいうきうとこしめしておのれを
それぞるいと不定(ふぢやう)なる世のくるめおすゝきやと
のあて。よしてひとへなられまれそてまへへべき

すぢよむつびなれ罪しんことはいと中々にようち
つゞきよをさしんさぞこゝ心ぐるしく身げりしの
こゝあまもおきりしぬほどしまなんあるべき。中納言（タ）
などはさしワくうかぐしきやうなれど。もし
ささとをくて。人がしもつねよ大やけのれうしろこ
とも女ぬべき。おひささなめれば。さもそしよしんま。
などかこゝなりしん。されどいといくまめぐちて。
せふ人さゞまりまてぞあめれば。それまもぐらしを
ぬふまやあしんなどのぬひて。身づくしはおぼし
もなれしろさ皮なりを。弁（大中弁ん）はおぼろけのれさゞめ
まもあしぬをかくのこまへば。いとおしくもくち

おしくもせひて、うちくに見しらちにさう西
などくさしく罪ゆれば、さすがに打思ひつゝ、いと
かなしく志なり給ひ、女三なれば、あなかちにかく
きしかるもいさ紀のるどりもかうさなりうしな
ことうちにこそなり給いめやんごとなきまづの
人どおいすといふことはいふしなさことなり、それに
さもるべきことにもあらず、かなしずさりとて、す思
の人をろかなるやうもなし、桐帝 右院の御時に、大后志
ぢうのもじめれ女御にて、いさまさ給しうど、
むげのす思に乗りぬへりし、入后ノ家に志びしも
をされ給にさうし、この女三 この御母女御にてもかれ

宴（者つが）のれちらうらに抱し給けめ。かたちもさしつぎ
まは。いとらしといられ給し人なりしかば。いげ
方につけても。このひめ（女三）やをしなべてのさいにはは
ともおもきじをなど。いづしくいもひ罪なべし。
（比）年も蓋ぬ。朱雀院にはれ心ちれをこらさ海にも
おりしまさはが。（朱ん）よろげあいらしきくおぼし立て。
（女三ノ）れもぎのことおぼしいそぐさ海。さしうらゆく
さきまがらげなるまで。いろくしくのしたるれしけ
らひいかへ（栢殿朱雀院にあり）愛のよしおもてにれ事よりいじめて。
こゝのあやましきをばまぎさせ給ず。もろこし乃
きさ紀のかぎりをおぼしやりて。うるはしくこと

こしく。やくざうとくの人々まいりて。それ
うしゆひをい。おほきおもてもしがわてよりつかしさを
めへうちれば。ことくしくおもすひとつて。
まいりまうしおぼしかれど。院の御こと。をむかうし
よりそむきて給ひてまいり給。今二所の大臣達
も御いりの上達部なども。げにあさきうりあつきを。おさ
かるをめしひとすけつゝまいり給。かくこうかう八人。
殿ばら人さる。さうまもいさず。うち春宮も御しすえ
ひとかひて。いかめしきされつそぐみひこまり。院
かしとはひさびしそめまれど。春宮を御して
まつりて。心づきしくさしめしつ。蔵人所。おさめ

殿のうし拙どもおほくなしせまへり。六条院よりも
はとゝひいとゝちるし。せくりもれども。へぐ志
禄。（そくはんじゃ）鶯若の大臣のはり出拙など。彼院（源）よりぞなしせ給
けり。中宮（秋好）よりもはさうぞくなしのまゝ。心ことに
てうぞさせまて。（秋好所宮に立給ひし時に）かれ昔のはぐしあげの具（ぐ）。ゆへあり
さ殿にあしらあらへて。さすがにもとのころぞへも
うしなはず。それとゝをて。その日の夕けりなし
さを給。宮（中宮大夫へ）の程のすけ。院の殿ごにもさつしふを（ミつひ）はし使
まて。姫（女三）宮のは方にまいしすべくの給ものをつれど。
うりことぞ中にありけり
（秋好）さしながし昔を今につくれば玉のをぐしぞ

神さびまける。院(朱)ゆゑんじつけて。おゐれまおぼし
出ることどもありけり。あえ(中宮のあやうり給ふとん)抱けしうはあらじと。
ゆづり(廿三ハ)きこしめへるほど。げまおもぐしきさん
ざしなれば。ゆかへりも。むかし(秋好ノ秋文ニ立給ひ時のなり)の衣をがさし(をき)垂て
(朱)さしつぎまゐる抱まもがよろげ世をけぎの
をぐしのうへさぶるまで。どぞ(地)税(よろこび)きこしきまへる

れ心ちいとくるしきをねんじけ。覚しおこして
十三ノ日ぎノ夕
このれいそぎもてぬれば三日ゆして。つねにれぐし
おろし給。地よろしき程の人のうへまてぐまいまは
とてさ夜かもろいかまゝしげまろけぎなれば。まして
いと衰げに。れ方ぐもおぼしまどふ。勝内侍のかむ志
気いつとさふらひまて。いとじくおぼしいりたるを。
朱ん
こしらへかゝまて。子をしふ君にかぎりありけり。勝ノ
おもひしきまへる別のこへがたくもあかれとて。
れ心こぶれぬべけれど。地おながちにれけうそくり
かりまて。山の座主よりもじめて。れいむことのあ
さり三人さふらひて。ほうぶくなどなる程。此世紙

別(はれ)なふれさほう。いうじくりなし。かゝれ世をさひ
すましたる修遊(そうたち)などゝは。潤(なこぶ)もえとゞめ子ば。まして
女衣たち。女れ。更衣。こゝろの男(おとこ)をんなかうこしを
ゆすりこちてなさどよむは。いと(乗ん)心あれたるしう。
りゝらでしづやかなる事はやがてことなべく見しものう
けたる。ほいたがひてなばしかうなくも。ゑめぐこの
おさなきこめ(かこ)はひかされてと見しの給ひ。問(令)より
始(をじめ)なりて。れとふしひのしげさいとさしも。六(添)条院を。
まうし(乗ノ)れ心ちよろしくと思なしをなて。糸(まいり)なふれさ
うぢりのこふなどこそ。これなるじごと。(添ノ)なりね乃
などく久しくさしまりなくれぞ。まことしきぢ。

天皇の儀式にはうけぎり給ひず。よれもてなしたひ
深しうさ面などは心ことなれどことさらにそぎ
なて。例のことくしかゝぬれ車にてまつりて。
上達ぶなど。さるべきかぎり車にてぞつかうまつり
なへる。院にはいうじく物悦ひきこしさせなて。ぐ
なしきれこうちをおぼしつゝりて。れ對面あり。うう
りしきさ面ならず。こゝおりしますかたにおまし
ようそひくさへて。いれなりなふかたりなへるれ省格
ミなり給ふ。ぬしかたりさ紀かきくれて。かなしく
とゞめがたくおぼさるれば。とゝうりもえたゝめらひ
給ひず。右院にをくれなりしれはひより。よれつれ

あくしゅへられしかば。しかるのほいふくすゝ侍る
しをこゝろよもくしふゆへて。ゝ毎ゝふことのゝ
侍つゝ。つゐまかくこゝそまつりなし侍までをくれ
こそまつりぬる心のぬるさ後。をげかしくおもふゆへ
ちかくかれ。方まさりてハことにもあるまじ。
しこまへこち侍おりくあるをさしくまいと志のび
がこさことおほかりぬべきけぢまこそ侍けれと
あぐさあがこくおぼしたり院（朱公）も抱心ぼそくおぼ
さるゝまえこゝろづよかしず。うち志ほこれ給ひ。
いまへいまれれもれがこりいとよもげかりこゝて
さをあてがふかあすかとおぼし侍ひ。さすがり程

二上二十五

へぬるなどうちゝゐて、ふるさはいのもしまてゝ
とげずありあんことゝ、しひをこしてあんかくても
のこりのよもひあるいをこちひの心ざしもりあふ
まじかれど、まづかりまてもれどめをさて、念仏(れんぶつ)を
ぶるとゝ侍る、もかぐしかゝぬ力まても世り
あがこゝろことゝ、こゝこのこゝろざしよひさとゝめられ
こゝろとゝ、しふゐへしられぬよしもあしぬをいまゝで
つとめあさをこゝりをぶるやすかゝずあんとて
おぼしをさてこゝろさ夜あるゝくりしくの給もする
ついでに、女こゝろちをあまゝうちすて侍あんこゝろ
ゐるしさ呼(ちり)にも、又しゆづる人あさをがこゝ(女三ノ子)もりさて

うしろめたくミワづくひ侍とて、まほにはあらぬれ
そしきを、心(深心)ぐるしとこそまつり給れこころの
うちにもさすがにゆかしきれあ望さ海なれど、お
がしすぐしがたくて、げ(日)にたく人よりも、かくる
すぢいつたくしざ海のれうしろミなきいくちなし
げなるつぎになん侍ける。其変かくておりしまをば
いとかしこさすゑの世のまうけのきこと、おめれ
しこのこのミ所にあつぎ罪しさすると、ましてこの
れことく罪しをかをこ海ちんことは一ことくして、
をあそうにうろめかなべきには侍らひ、さらに
ゆくさきのことおぼしなやむべきにも侍らはど

げること限(かぎり)あれば、おほやけとなりぬひ、よれまつり
ごとれこころにかなふべしとはいひながら、女乃れ
こゝろにおほぎりのけざやかなるれ心よをおるべき
なも侍らざりけり。すべて女のれこゝろにはさ海ぐ
まことのれうしろことすべきもれはなをさるべき
すぢに契りをかもし。えさらぬことにはもぐるこ
ゝさゝゆるれまもりめ侍りなんうしろやすかるべき
ことに侍りをお後しゐてのちのよれれうしろがひ
のうるべくはよろしきにおぼしえらひて、思(おぼ)て
さるべきれあづかりをさゝめをかをゐべきにはなん
侍りと。養(そう)し給。(朱河)さやうにしひようこと侍れど。

それもかくさことなるんをけり。いかしへのくあし
とさて侍るにも。世をこもつさりのこゝこりごゝに。
人をえらひて。さうさ面のことをしゆへるこゝろ
おほかりなり。ましてかく今はとこの世をもちなる
ことはまてごとくしくしゆべきにもあらねど。まこ
しかすつる中にも。猶がてきことありて。さ面ぐに
しひ口づらひ侍ほどに。やまひをもりゆく。又こり
かへすべきにもあらぬ月日のるゆけば。心おいて
しくなん。かくかくいてきゆづりなれど。このいもけ
なき内親王（女三ゑんワウ）ひとり。をもりきてもぐこゝ見して。さう
べきよすがなも此心におぼしさゞめて。おづけなへ

と罪しまほしき代、持中納言などのひとり抱しつゝ
程に、すこしよるべくこそありけれ、胡ほいまうちぎ
こゝにきんぞこれて、ねたくぬぼし給ひとこそし給。
中納言、和良、まめやかなりけるも、いとよく川かう
まつりぬべく給ひを、何ぞもまゐあさくて、女どり
すくなくこそ給ひめ、かたじけなくともふかき心
まそ、うしろこそこしさを給ひんに、おもしますれ
かげにかたりていぬぼされじ、をこぐもりさ紀こゝじ
りて、つうまつりさすことや給ひんと、うたがは
しきかるのこゝなん、こゝろぐるしく給ひべきと、うけ
ひきに給ひ、夜に入ぬればあるじの院、まゐらう

とれ上遅(源ノ此ニ云ノ云ニ)ゐちも。これ此(朱ノ)前にて此あるじのこと
さうじ(精金ニ)拘にて。うるひしかしぶ。なほめしくおもせ
ゐへり。院(朱)の此まへにきんかうのかけぢんに此もち
なぐ。昔にかもりてまいりを。人ぐ泪をしのぐひ給。衣(あれ)
なりすぢのことにもあれど。うるさければかしぐ。種(源)
かけてゐり給。課(ちく)どもつきぐに給。別(朱ノ)当大納云(女三と云ふ人ニ)も。
此をくりにまいり給。あるじの院(朱)も。かふのゆゑる
いとに此風くもしまて。かきこゝろりなやましく
おぼさるれど。この女(女三)の此こと罪しさぐ。先川るを
こゝろやすくおぼしかり。六条(源ん)院にはなほ心ぐるしう
さぬぐおぼしこゝろ。ひしさきのこへも。うるかれ

さぶめなどかゝるてもほのきて給ふれど。さし(笑ん)もあら
じ。前(種)妻院(さいゐん)をもねんじ事に罪し給やうなりしかど。
ひざとしもおぼしとげずなりましをなど思して
さうことやあるともとひ罪し給ひず。なまごころも
なくておはすうまいと(涼ん)おしく。此ことをいつまおぼ
さむ。我心は家もうちうまじく。さうことあらんに
つけては中々いとゞふさこそまさしめ。こうさぶめ(笑ノ)
給はざらん程。いまさひうるがひ給ひんなど。やすらぶ
おぼさう。今(世)のうしじと数ては。ましてうるさは満(で)て
罪し給ことなく。長なりは中なれば。さぞしうるは
満(へぶそ)おしうることあらんもいぶせきを。それ(朱より涼ノ御ノ給ふ)有も

うちやすうてあし給ひ。又の日ゆきうちなり。兎の
かしきも抽衣に。さまにしかるけき紀の此抽衣。男ゑ
かしき給。院（朱 源訂）のるのもしげなくなり給ひしかば。此
とふらひに氣（まり）て。衣なることぞのまつかれ。女三の
宮のれことせいと揆（まて）がるげにあばして。しかくか
んの給ひをけかしかば。うろぐらしくて。えきこて
いなびず成ましを。ことくしくぞ人はいひなさん
かし。今はさやうのこともうぬくしを。そさ海
ぢくせひなりにこれば。人づてにかしこまりを給し
ほ。とくのがれきこしをこいかんのけいぞに。
いふかきさ海なることどもを。のるまひけいけし

にはえすくくしくもへさひやさてなん。ふりき
れ山ずこまうけろひ給りん程にこそも。つさし
なしめ。おぢきなくやおぼさるべき。いとじきこと
ありともれらめあるよりもうちうしにさしまあり
まじき後。こころかせきのひそよ。かれれらめこそ心
づくしかしめ。それもうらもなしずもてなしてん。
詠れ もくのどうまてゆし給ちじなどこそ給。えう
なきれすきひごとをごとに。めざ海しき物に見して。
心やをかしぬれ心ざ海なれど。いつぐおぼさむとお
ぼすに。いとつれなくて。衰なりれゆづりにこそは
あるれ。こくにはいうなり心を並なるべきにか。めざ

ましくうてはなどく。とがあらうまじくは。心やすく
ても侍なんを。かれさて（源氏文）女れのれかるゞ海りても。
（笑と女三ハ口とこゝ）うとうしずおぼしうずまへ。うんやとひがし給を。
（源詞）あまりうう打とけぬふれゆるしを。いかなれだらと
うしろめたくこそあれ。まことはさぶらはおぼしゆる
して。これも人も心えてなぐらうまてなしなく
給はゞ。いまく衰になん。ひがことに罪しなどをん。人の
こと罪いれぬふな。すべてよれ人のうちといふもの
なん。ふがいひ出ることもなく。なれづらし人のなり
らひなど。うちほくゆがこ。さまずなることいでくる
抱なるなを。心ひとりにしげめて。おりさ海にしる

がふなんよき。おぼきまさしぎて。おいなき物恨し
給なと。いとよくをしへ男に給。心（笑ん）のうちまもかく見
よりいでさまさるやうなることまて。のぶれ給ふなる
きをよくげにも男なきじ。我心にまもぐりなひ
いさむることにしるがひなべき。それがどちのうろ
よりをこれるけさうまもあしぐ。をうるべき方なき
抱りし。おこがましくしひむすぼしなくさ海。世人
にもりきてしじ。或ハ宮のおほ小方（笑ノ事冊）。つねつり
うけりしげなることども紙の給出しく。おぢきなき
大物（ぶ）のれことまてさへ。おやしく恨（うらみ）をねこ給なるを。
やうにきて。いつまいちぎなくしひおりを給ふん

なぞおいらかなる人のれうろといへど、いかでかも
かぢりのくまはなかしん、いまはさりともとのみ
ひがみをしひあがり、うしなくてゐしけり世のひと
ひしへなしんことをしるにはしひけぐけなへど
いとおいらかなのみまてなしなへり、年もかへりぬ
源平多之地
平薩院にハ姫家六源栗院にうつろひ給へん、れいそぎ
女三
女三へ
をしなふ、男に給へる人ぞいとくちおしくおぼし
なげく、うちにも此心ぞ人ありて男に給けり程に
冷
かれさぞめをさしめしておぼしとまりに
かり、さりはことしぞよそぢに女給ければ、れ契乃
源ノ
ことにおぼやけにもさしめしすぐさず世中のいと

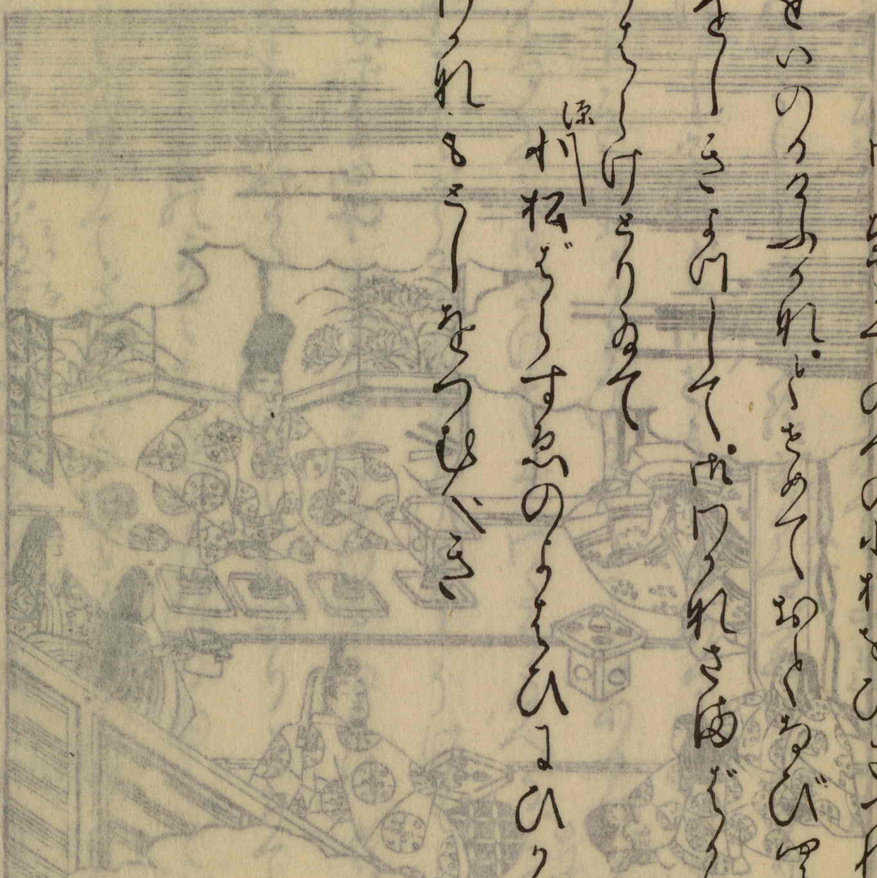
ゐるまで、かねてよりひぐくせ、このひづくひおほく
いかしきことは、昔よりこのこ給もぬ、(添ノ)れ心まで、これ
よへさひ申給、正月廿三日子の日ゐるより、左ぢ(ひげぢ)ねぎ
の小方(ぶ)、けれまいり給、かねてかしきもしし給
もで、いといたく思びて、おぼしまうけたりかれど
まはりまて、え(添ノ)いたりへしきてし給もぜ、志(ぶ)のび
たれど、さぞうりのれいきほひなれど、けたりぬふ
紙式(ぎしき)など、いとひぐきことも、こゐるこ(六条院ノ)のおとぐの西(ぶ)の
もなちいでまおましよそふ、屏風へぐしろよりもじ
めおさらしくもしひしつしかれたり、うるりしく
いしなどいたてず、れだしき罕まいれしとれ

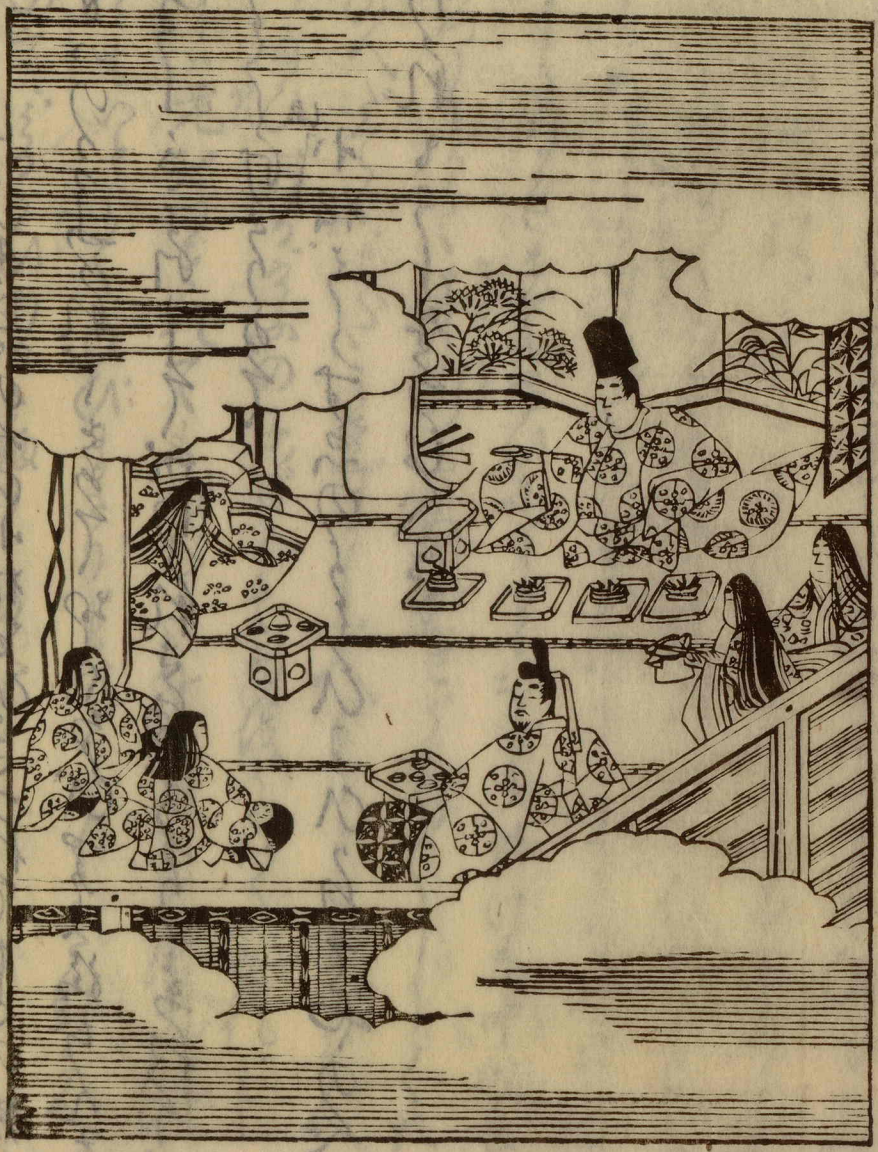
けうそくなどすべてそのれぐどもいとさらしま
きさせぬへり。らそんのこぶしかたくらひ。れ衣
ぞこよつすへて。夜冬のれさうぞくかうごくすりの
ちこれすじつもゆすりつきかうげのちこなどやう乃
抱うちくきらしとつくしぬへり。れかぎしの墓
まはぢんしたんをいくり。めげしきあやめ
をいくし。おなじきねをも。気づかひなしたる心
ぞへあり。いまめしくかんの表抱のこやびかりゝ。
かどめきぬへる人にてぬるれぬさ面りしなし
ぬへり。大方のことなどしとさしてりことくし
うしぬ程なり。人ぞまいりなどしぬておましゝ

いで給とて、かんの君には對面あり、此心のうちには、
いとしへおぼし出ることもさ面ぐなりけんし、
いとけなくさまらにてかくれ笑などいふことも、
ひがぎへにやとおぼゆるさ面れ、な面恐しく、
人のおやげなくおもしますをめづらしく、さし
月へぶてゝ三年ゆゑ、いともげしかれど、れ
けぎやうなるへぶてもなくて、此物終罪しかりし給、
後左兵衛督、右大弁之
おさなきさ君もいとうけらしくてもれし給、かんの
君はうちつぎさてもれらんぎられじとの給ひなを、
大将のうちけいでにぶに、れらんぎさをんとて、
ふたりおなじやうに、ふりまけがきのなまごろなるさ

なをしすぐるどもまてなりす。（浮訂）ぞぐるよひもこぶ
うらの心ゝは。ことよおもひとぶめられど。ゑめぐ昔
なぐらのわかくしき有様まて。おしこむかことも
なきを。（玉ノ子ちのすり）うらすゑぐのもよほしありなん。ゐ夜
もしこゑきまで。せひしらるゝありも給けり。（タ）中納言
のいつしかとまうけ（タノ子ノすり）こゑるをうとくしくれ
もひへぐてゝ。まぐこゑぎずし。人よりことよ（玉ノ）ぞへ
とりぬひけり。かふの子ゝ日こそゐ渡うれこれし
ぐしハ（かひ）老をわしれても行べきなとさて。（玉）かんの（地）
きこゑもいとらくゆびまさり。もれくしきけさん
そひて。こゝろひあるさ夜しゆへり

わかばさすのべの小松をひきつれてもとの岩ね
をいのるけふかなとせめておとなび給ふちんの
をしき四してわかなさまばかりまゐれり源
かはらけとりて
源小松ばらすゑのよはひにひかれてやのべの
わかなもとしをつむべき





なれど、(ほノ)ほとゝしかたしまて、上達ゝあまた、こゝあまた
のひさしまつき給、或ゝ(些ノ文ム)家にまいりつゝ
おぼしされど、(ほノ)れをうそこあるをけるゝ、うくし
ゝしきれなるゝひまて、こゝろあるやうなるんを
びんなくて、日ゝけてぞつゝりまへる、(ひげぞ)大鬚のしたり
がなまて、かゝるれなるゝひまうけだりて抱し
給も、げに心やましげなるつぎなめれど、(抱ノ元牙之)れむまゝこの
光ゝ達にいづるまつけても、おりたちてぞうやく
しまふ、こもれゝそえぐ、おりひつ抱ゝそしぢ、(タ)中納言を
ちゞめなりて、さるべき限とりつゞけまへり、れゝを
らけゝぐり、(ほうな)弟葉のれあつ抱まいる、(ほノ)れまへまはらん

のかけぢんよろ。おほんつきどもなつしく。いまゆ
きたるほどまをられたり。朱雀院のれんすりのこと。
なほ後ゆしぎまて給ふぬまより。衆人などいめさず。
れ笛など。おほきおとゞのそのうちにとしのへなて。
世中まこのれ笑より。又めづらしくきよらをつくす
べきことあらじとのまひて。もぐれたるねの限を。
うねてより。おぼしまうけたりかれば。悪びやうり
れあそびあり。とりぐまをうなるよ。和琴ぞ。か志
おとゞの。第一まひし給けるれことなり。さるもれく
ぢ手の心をとゞめて。引なし給へるね。いとなしび
なきをこと人にうきたてまくしまへば。尤(拍)感の曹の

なきをこと人はうきてそまくしのへば犬鬼の

うくいるぶりを、をめのへぞ、げまいとおもしろく、
おさくとゝりまじくひく、行ぐすもぶ手思ひぎと
いひながらかくしをえけがぬひぎぞうしと、こゝろ
まつく衣に人ぐおぼせ、しらべにしたがひて、おと
あるまどもさゝまれるもろこしのつくへだも、中く
ぶひしるべきたあらはなるをこゝろにまりきて
こゞうきあそきたるすがゞきによろげのもれくねと
とのへられたるは、こへにおもしろく、おやしこさ
まぞひぐく、ちとおとゞはゞとれをもいとゆかり
もりて、いたうくだして、しらべひぐさおぼくありを
てぞうきなしのふ、これもいとひらくかり、の

ばかねのなつしく。おいぎやうつきなるを。いと
かうしたしはきてしぎりしをと。みこたちもおごろき
給。琴(きん)は兵(蛍)の宮ひき給。此れことは。宣湯殿(ぎやうでん)にて此
まて。代(ぐいく)に東(ぐい)一の名ありし此琴(こと)を。相院(相帝)の末(まさ)つ
かた。一尺(此母ハ悪れ)家このミ給ことまて。給りなへりかるを。此
ありのきよしをけらし給りんとすらん。おとゞの
戸給りなへるれつたへくをおぼす(添ノ)ほいとあれは。
昔のことも思しくおぼし出らる。こ(蛍)ともしひちきえ
とゞめ給りず。れかし(添ノ)きさりなて。きんもおまへ(添)は猿(ぬぐ)
きてしさを給。もれ(添ハ)衣にえるし給りで。先げしき
地ひとけぞかりひさ給ことくしうしれど。恨(ぬぐ)

なくおもしろき夜の川遊(ミあそび)なるに、さうがれんぐゝ、こゝ
しにゆきしてそぐれたるこゝ忠のかぎりいぐしして、
人り声(こ)になる。夜の更(かけ)ひましに、おれてしらんべども
なつかしくかたりて、野柳あそび給程、げにねぐら
の鶯(ぐひとかどろさ)驚ぬべく、いたじくおもしろし。ひたくし
ごとのさ風にしたるしなて、緑(ちく)などいとをやうさくに
まうけられたりなり。暁(あつさ)うかん(む)のきこえ人り給。川(源ノ)を
くりもれなどありなり。うう(詞)世をすけるやうにて、
おしくらす程に、年月のゆく忠もしらずがなる
をかうかぎんしらをこ風人りけるにつけてはこころ
ぼそくなん。時ぐに老(おひ)やまされとこゝおひくらべ

ましう。かくかゝりし三月の末をさくらもみなちる

ずして。女いのちきはくちかしくなんなどきこえ

あて。義にもかしくもとひぞ聞え給ふ。なほさる

しもあるをば。中宮はのまゝて。うへそぎいのり

給ひて。いとあはずからかしくぞおぼされけるが。むかし

我も。まことしの親王せばかりへき殿計にもかひ見えあて。

さがらくにまやうありし流心だんとて月にそへて。

くせにすゝみて給はつけても。どうつきずおもひ

ことし給ひかくて二月の十余日より。菩薩院ぞ

十三 姫宮六条院にわたり給ふ。此院もまた心まうけよそ

つかもずわかれまゐりし西のもちひつでにり。流

恨(ちり)たてゝ。そなたの一二の基(たい)。ひたゝ。我かなりて。女房乃
馬(つぼ)くまで。こゝ夜かまたけらひしがとたまへり。内ま
柔(まいり)おふ人のさほうをまゐびて。彼院(朱)よりもれでうど
などもたゞだろ。ひたりおふぎしきいへどさしなり。
れをくりまさぎ遣ちどあまたまいり給。かれけいし
のぞミ給し大納言(朱ノ別高)もやすしずおもひながしさふ
らひおふ。れ車よをたる所ま。院(源)ひたりおて。おろし(女三と)
なり給ほどなども。例まいたがひたることどもなり。こと
人(源教ヨリそもなきと云)まおもすれば。よろげのことかざりあるまて。うち
まいりまもまず。むこの大きさといたんまも。こと
たがひて。かづしきれ中のあもひどもまなん

三日がほどいかれ院(朱)よりも、おほじの院(源)がこよりも
いかめしくめづらしきうやびをけうし給。女いの
うへ(紫ん)もことはふれて、こゝにもおぼされぬ世の有さ海
なり。げにかうるはつけてもこよなく人りおとり
けるくこともあるまじかれど、まこなるぶ人なく
なるひなて、(女三ノ)ちなやかなひさ紀とをく、おなげ
まくきけるひまて、うけるひなへるに、(紫ノ)お海もしる
なくおぼさるれど、けきなくのミもてなして、此
けるりのほども、(源と紫ノ)もろ心にもうなさことをしいでなて。
いとらうこげなる此有さ海を、(源ん)いとゞあるがうしと
せひきこし給。(女三)姫宮ハげにまゞいとらうたくかな

かたなりにおはするうちにもいといはけなきさ（私[illegible]）
して。ひたみちにわかびたまへり。かのむらさきのゆかり（源心 紫上の事）
たづねとりたまへりしおりおぼし出るに。かれは（紫）
されていふかひありしを。これはいといはけなく（女三）
のみみえたまへば。よかめり。にくげにおしたちたる
ことなどはあるまじかめりとおぼすものから。いと
あまりものゝはえなき御さまかなと見たてまつり給。三日が
程は夜がれなくわたり給を。（紫心）としごろさもならひ給
はぬこゝちに。しのぶれど猶物哀なり。御ぞどもなど
いよいよたきしめさせ給ものから。打ながめて物し
たまふけしき。いみじくらうたげにおかし。（源心）などて

よろづのことありも。まこと人とばならべてこゝろべきぞ。
あざくしく。心ふとくなりきりまるつがをこ
こりまゝうることもいでくるぞかし。まうけれど。中(タ)
納言をばえおぼしかけずなりぬめりしをと。我
ながらつゝくおぼしのべけるくは。泪ぐまれて。
と(源詞)我ぢうりはことゆりとゆるし給てんか。これより
後のとぶえあらんこそ。力ながらも心げきなるべ
れ。まこさうとて技院(華)にこそしめさんことよと。
さひしぶれのへる此心のうちくるしげなり。すこし(紫)
ほゝえて。こづ(詞)しの此心ながらぶりしえさぶめ給
まじうなるを。まして。ことゆりもなるも。いづこる

まじなるを。まして。ことゆりもなるもいひこ
とゆるべきまかしいふかひなげまとりなしのみる
まづしうさへおぼしまて。つしづえとつきてより
かしのゝれ。此況を引よそ
めまちくうつれバかまか世中をりきゑ
とをく。軋けるか。ふることなどうきまぞ語を。とりて
こゆて。たちなきことなれど。げまとことゆりまて
命こそこゆ絶めさぐめちきよれつゆなしぬ
中の契を。とこまもえ。ひたりのまぬを。いとかくから
いたきひぎれと。そぐのし罪しのへバ。なまかうま
おりしき程に。えあらずまほひて。ひたり語を。こいぐ
しのふも。いとうぐまはあらずし。とし。此さしや

あらんとせひしことども今ことのこゝもてもなれ
給つ。さしがうまこそもとうちとけゆくすゑは
ありくてかく世のさてこゝを。なれめなるぬこと
のいできぬるよ。せひさぶむべき世の有さ海にもあ
らざりなれば今より後もうきろめこうぞ覚しなり
ぬる。さこそつれなくまぎらいしぬへど。さふしふ
人ぞもおもはぎなる世なりや。おまゝ抱しこまふ
やうなれどいづるもこれ（悲）なるのれけもひにハ
ゝさりけゞうさ海にてゐしこまへばこそこと
なくなぐらかにもあれなしこちてかぎりなる
有さ海にけられてもえるし給いじ。まゝさりとてくゝ

あさましきにつけてもやすからぬことのあはれおほし
をり、みづからしきことぞそなほんうしろめたど、
そのかみはうちうちしらひあらけしげなりしを、紫上も
まいりぬやうにまうとけもひおもしく御心ながらし給
つ、秋のころまでおりゐずみ人のなかなかずつひ
なひころも、そこにいしくおぼしてうくそれかれ
あまたまれし給めれど、は心くるまよひて、いま
めしくはずれるこそはまことあるずとめなれて。
さりぐしくおぼしうりつまこのころやきんうく
わりなくるこそめやもなれ、おもはびわれこころのうきぬ
まやめんまれもむつびさせてあしまほしさ給。

あいあるへだてあるさ海に人ごやとりなすさんと
すらん。ひとしき程おとりざ海なども人まこそこ
ならずこゝぐつともそれづらいでくるわざなれ。
うらじけるく心ぐるしきれことなめれど。いつて
心をれをしじとなんせふなどのこまへぞ中務
中務の君などやうの人ごめをくませけゝあまり
なるれせひやすくなるどいふべし昔はこゝなるね
さ海につひなるし給し人どもなれどとし
ばはれ方にさふしひてこれ心よを写れこるなめり。
ことれうこゝくよりも。いつかおぼすらん。もとより
ちひとなれこる人ごは中しこころやすきをなど

ひとなれたる人ぞは中にこころやすきをなど
をもむけつゝとふらひまゐる給もあるを、かくなし
たる人こそ中にゝろしなれ世中もいとつれ
なきものをなどてかされこはこひなやまんなど
おぼしてあまり久しきよひねも例ならずひとや
とがめんとこころのをよくおぼして入給ぬれば此
ふしを海来りぬれど、げにかたはらさびしきよかく
へにけるもなをこゝろしぬこゝちしれど、かゝ
すまの此副のおりをおぼしいづれば今もとかけ
たなれ給てもこゝにおなじ世のうちにこゝにまし
しかばと、ひゞ身までのことはこちをきあらしく
なしうし省き海ぞうしさてそのまゝぞれに

まれも人もいのちたへぞ女ありましうぞ。いかゝひ
あしまし世うちと学しあるを寸。風うち吹たる親の
けまひ親やうまて。おとも扨いこれのもぬを。ちゝ
くさかふ人ぞ。おやしとやきうんとうちもこゞ
ろき給もぬも。扨いとあるしげあり。親ふるき鳥の
声のきゝしたるも物哀あり。ひぎとつくしとよは
あしほどかやうまさひこゞれのふけるや。源れ夢
まこし給はれぞ。源ん うちおどろきなて。いつまと心さい
がし給ま。鳥のほまち出なへれぞ。親ふるきもしら
ぞがかりいそぎ出なふ。女三いといまけあきれあり
さ面なれば。めれとしたちをくさかしひなり。つまぞ

としあけて出給を、こなりをうる。明ぐれの光は雪の光
こしておぼつかなし。名殘までとまれるれはほひ。
やこはあやなしと独ごとる。雪は前ど消滅りしるがい
としろき庵のふとけぢめこしまれぬ程なるは。
なを殘れるゆさと志のびやうまちずさこ給て。
こかうしうちくこ給も。ひさしくかゝと
なりつゝなしひは。人ごもそしねをしけ。やく
まさをなりて。ひさあげこり

源詞
こよなくひさしかりけるに。男もひえまゐるなれ。
とぢさしゆるころのなろかなしぬまゝそあめ
れ。さるはつこもなしやとて。雲ぞ源ひさやりな
どしたまふに。とくしぬれたる雲ひとへの袖を
ひさかくして。うしもなるなりけしきもれ
うしうちとけて。そこあらぬ雲よういなど。いとこぶ
うしげにおかし。恨なき人とさこゆれど。うたうめる
世をとおぼしつゝべくるよろづいましへのことを
おぼし出つゝ。雲とけがたきれかしこなを。恨罪なて
その日いつししぬへれば。源女三へ元けたり語もで。ぶん殿
まはれさうそこをぞ罪し語。文ノ詞けさのゆさに心らあや

ありてハとあやましく侍れども心やすきうくま
ゑめしひ侍りとありけめれどさ写しきせさせへりめと
むらりごやしなずよこそこしくりことなす家ことあれ
御色やと御ぼえ院よこそこしめさんこともいと
おしごのごろごろけくろもんと覚さどえさせ
わらぬぞさは御もひしことぞうしおれらるしと
きこえさせひつづけおよ女君もさひやかなるさき也
心あやどくろしげり給げさは例のやうなり御ほ
とのごもりおきさせねて家の御方ょ渡らこせ給へれ
給ふともさげしげもあらさけり渡すれど御筆
あなどひきつくろひてきこえきこゆる

中(保)とち紙へぶつる程はなけれども心こゝろ
けさのあも雪・梅につけなへり・人めして・詞のまゝ
殿よりなしをことの給・やがてこいぶしてもし
ちゝおいしますもろきれぞどもをさなて・茶を
まさぐりなつ・友まつゆきれほのゝ御れうへり・
打ちりそふ雪を詠(ながめ)なへり・鶯(うぐひす)のいりやかり・ちりさ
紅梅(こうばい)のすゑにうちなきたるを・袖こそにほへと茶を
ひきかくして・こすなしあげてながめなへ家さ後・
長なもうる人のおやまて・をもきくらねとこえ
給いず・いうちな後めしきれさ後なるを・れ(廿三ノ)かへりを
こし程ふるこゝちをれば・いりなて・女(紫)君に茶をこゝを

なり給。菜といひしがくこそよはいまはしかゝ稱お。
（源氏　女三をすんよふかり）
一 楯にうつしていへ文ちりぢりもころもく方なくや
（紫を楯にうつしてこ）
おしましなどの給。これもおまさにうつろもぬほど。
めとまりにやあらん。菜の盛（さかり）にならべてこぞやなど
の給に。（女三ノ）れかへりあり。紅のうすやうすり。おぎやかり
としつゝまれさうをむ（源ム）まつぶれて。れるのいとはか
ゝ給。志はしこをなしでおしぞや。へぐろといなけれ
どおもくしきやうなんは。人のほどかくしけ
なしとおぼすに。ひきかくし給へんもころをさ
ましべくれば。かくそぞひろげなへるを。志（紫ノ）りめに見
とこをてそひかしなへり

とこをてそひかしぬへり

女三 たゞれくてうちのそらにまぞ消(きえ)ぬべき風にしたゞ
よふ雲のあハ雪はるげまいとつくおさなげなり。
(紫ん)さゞりの程に成ぬる人はいとかくハおもとぬものを
と見とまれど、こぬやうにまぎらしてやこのぬ。
(源ん)こと人のうへならば、さこそあれなどハ悪びて思ひえ
ぬべかれど、いとおしくて、(詞)こゝ心やすくをさひなし
ぬへとのこゝろし給。(源地)ふハ(女三)家の此方にひ家つくり
ぬふ心ことにこちけさうじぬへるはありさ夜、いま
こなる女房などハ、ましてこゝろひありやとおもひ
さしぬらんかし。はめれとなどやうのおひ志しへ家
人ぞぞ。いでやこのは有様ひと(源ノ女)家こそめでたけれ。

世ちごと女三のあらそひ給ひしと
ゆんざ海しきことはありなんかしと。うちまぎて
さふもあるかり。女家（源ハ女三ノ神）そいとらうたげにおさなきさ海
まて。はしつらひなどのことくしく。よぐけく
うかりしきに。こづくらはるに心もなく抱たりたすさ
はほどまて。いとはぞがちに。こもなくあえかなり。
ことにはちぢなどもしこ海たず。こぐちごのおも
ぎしひをぬ心ちして。心やすくうけしき海し
ぬへり。院（条）のミかどは。おこしくすくよかなりるの
はざえなどこそ。うろえ（りと）なくおかしますと。世人な
へあれ。おかしきすぢ。な海めき。ゆへくしきかるは。
人にまさりぬへるを。などてかくおひこかに（女三と）おかし

そのひろん。さらハつとめ心とゞめて後人家に注三ことく
ふくしをしそつとも侍ぐちおしかれど。よく
かしずきまり給。くゞ注三ノ評男し給まゝよ。ちかくとかるび
きぬのそで。ぬれつくなどをもおぼし給けることゝ。
いとけなくこゝちのいとまひ出て。ゑゝとなるすこし給。
注ノ昔の心なしかりしかばうくて心をとりせまりしを。今は
世中なをこれさ侍ぐるやうひなぶしめて。どおるにも
かゝるも。さはとうかくことへ。うさきもれなりそへて。
とりぐはこそおぼうハありぬれ。注三ノそで去おもひハ
いとおしまほしきほどなりうしとおぼさてり。
注ノさしちなしびめずれずミまりおへるをしゞるうりも。

基のうへ(笠)のはありさ海ぞ。ち紙あるがうさ。まれ
おぼらもおかしさてからとおぼ也。一夜のかど。
あしされまも忘しくおぼつかなく。いとゞしきれ
ころざしのまさりを。おどかくおぼゆらんと。ゆく
しきまでなん。院(朱)のミかど八月(二月ノ事)のうちに。ミちに(仁和寺)
うけろひなめ。この院(源)に衣なりはをうそこども四九
給。姫(女三)家のはゝといさしなり。まづらりしくいりに
きく所やなど。たゞからなふるなくて。ともかくも
こゞは心にかけてもてなしなべくぞ。こびく四九
給けり。されど(朱ハ)衣にうしろめたくおさなく(女三ノ)おもすり
をしひきたし給かり。基のこゝにもはをうそてゝとに

をしひきてしかり。紫の上にも此をうそてことに

あり。おさなき人のこゝろちなきを海にて。うけろひ物

すらんを。つゝなくおぼしゆるしてうしろゝなへ。

さつきなべさ女もやあらんとぞ

そむこさうしこの世にのゝろ心にそいふやま

ゝちのほどしありけれ。やゝをえたるけぞ。罪ゆるも。

をこがましくやとあり。おとゝもゝなて。衣なる法

をうそてをうしてありこさうしなへとて。此けうひ

にも女房して。うたしけさし出さをなて。志ねこを

給。此うへりはいかゞおどこさうしまくおぼしこれど。

ことくしく面白うらべきおりのことなしれば。

こゝろをのべて

そむく世のうしろめたくはさりがたきほだし
をしゐてかけなはなれそおほやけまでおぼしけり。
やのさうぞくはほそながそへてかづけ給ふ。御手
などのいとめでたきを。院御らんじて。なにごとも
はづかしげなるあたりに。いはけなくてみえ給ら
んこといと心ぐるしうおぼしたり。今はとて女御
更衣たちなどおのがしゝわかれ給ふも哀なること
なん多かりける。尚侍のきみは故きさいの
宮のおはしましゝ二条の宮にぞすみ給。姫宮の御
ことをおきては。この御ことをなんかへりみがちに
ことしもおぼしたりける。あまになりなんとおぼし

これどかうさをひまはしてふやうに心あはなく
しといさめなて。やうく仏のれことなどいそがせ
うまふ。六条のおとゞは。衣にあらずのゝおぼして。
やうにしれあらりなれば。さしごろも忘がうく。いかな
らんおりに對面あらん。今一度あひこそ。そのよれ
こともきこしまほしくのゝおぼしつゝるを。かゝゝ
に世のきこゝもそゞうりなべきものほどに。いと
おしげなりし世のさはぎなども。おぼし出らな
れば。よろげにつゝこゝしなひけるを。うのど
やうに成なて。世中をしひしづまり給へんにほひ乃
れ有様。いよくゆうしく心許なければ。ありまじき

こゝろはおぼしながら、大方のはとふこひありこと
つけて、哀なるさ夜につれに寄し給。膠 已かくしうる
べきれおもひなしれば、はゝりも時ぐにつけて寄し
かりし給。膠 昔よりもこゝろくうちづしとこのひとて
ゝるゝれけるひをこ給(源ノ)にもなん紙悪びがたくて、昔の
膠ノ中ごちゝ 中納言の君のもとにも、心ふかきことぐもをつゝに
の給。彼人(中納言君)のせうとなる、いづこのさ紀のかゝをめし(源ノ)
よもて、けかくしく、いかし人にかへりてかゝらひ給。
人(詞)づてなるで、掛ぐしにきてしたらすべきことなん
ある。さりぬべく寄しなびかして、いゝじくしのびて
来んいまはさやうのありきも、所をさ男のほどに。

来んいまはさやうのありさも面をさ男のほどに。
おぼろけなる寸志のぶべきことなれば、そこなるも又
人にはもしし給りじとおもふなりかたこうまうしろ
やすくなんとの給。かんの君いでや世中をおもひ
しるまつけても。昔よりつしきれころとこころしひ
つめつるとしごろのもてに。衣にかなしきれことを
さしをきて。いかなる昔がたりをか思えん。げに人は
もりきるぬやうなる心のとちんこそいとちづく
なるべかれとうち頭き給ひておを文にあるまじこと
よしとのこまこしも。いよしへまりなりし世なり
ぶに心かたし給ひもぬことにもあしざりしを。
げにそむき給ぬるれこめうしろめたきやうには

あれど。あしざりしことはもあらねば。今志もけぎ
やうまさまはりて。ふちうしつが名いまさしは。
とりうへしのべきまやとおぼしをうして。此（和泉守とうこ）の
ぶれもりを君のしるべにてまうで給。女（装）ぶれ。東（源詞）の
院に抱する君（ひとう）達（まつひと）の君の日ばよづしひて。ひさしく
成まけるを。抱さはがしきまぎれりとつゝりねど。
いとおしくてなん。ひるなどけぎやうはつゝしんも
びんなき代。夜の方に悪びてとなんせひ給ふ。人
はもうくともしらをじと思ひなて。いといてこゝろ
げさうし給を。例（装ん）いさしもこゝぬあらりを。おや
しとこゝなて。せひあるを給こともあれど。娘（女三）宴のれ

しとゝなて、さひあるを給ことも、あれど、娘宮のれ
ことの後は、何ぞもいとすぎぬるかるのやうには
あらず、そこしへぐろう心そひて、こしらぬやうまて
おりす。その日は（源）さん（廿三）番へも渡り給ひて、れふこうさ
かうし給。こゝ秘ちどる心を（源ノ）へてくし給。よひ
ゐして、むつましき人の限（うぎう）四人ばかり、おじろ車（源ノ門ノ車如ベー）の
音おぼしてやつれたるまていでなふ。いづこのうみ
してれをうそて罪なふ。（勝ノ人々）うくつたりおりしまし
たるよしさしめき罪ゆれば、おざろきなて、おやさく（同）
いうやうに罪したるまゝ、むつかりたまへど、おかし（和泉同）
やうにてくしをしんに、いとびんちうゐらんとて、
あれがちにさひめぐしていれなる。れとふしひ（源同）

ちぎ果てゝ、こゝろもとゝ抱ごしにても、さしも
昔のあつまじき心ちどいはしぶちりつりけるをと、
けりちく果てゝ人へば、いたくちげくくねざり出ゐへ
ま、されぢよちけぢうさはとかけおぼさる、か
こゝにおぼろけちしぬれこじろきちれば、衣も
すくちしぶ、ひんぐしの墓ちまけるを、これこの
ちのひさしにすへ（源と）をりて、こさしじのさりも
ちめられぢ、いと（源詞）けりやかちうこちもしちられ、
年月のけもりとも、まぎれちくがぞへしるし心
ちしひまくおぼめしきいつこじうつしくこそと、恨
果てゝ、衣いたく文行、玉もまあそぶをしの

ゝ急ぐなど衣に罩して、志めくと人ぬすくなき
家のうちの有様に、さもうつりも世かれとおぼし
つゞくるに、座いだうがまねちしねど、まことなり、胸
もちにちん、昔にかりて、おとなくしくは罩し
給もれかし、これをうてやとひきうごうしあふ
年月を中に備て、逢坂のさもをさがくて
おつるなるべう、女
胸のこをさとめがたき志水にてりあふ程は
ちやく絶にさ、などかけちなれ罩しあへどいにしへ
をおぼしいづるも、これによりおほうはさろいうじ
さともありし世のさもぎぞと、さひ出給に、げ

今一さびの對面しありもすべかりけるとおぼし
よそうる也。(比)もとより浮しやかる事はおりをざりし
人のさしぐいさ面ぐま世中をさひきつもさし
うるをくやしくおぼやけつるくしのことまふれ
つ。(ぞ)数もなくおぼしあつめて。いといくるし給ま
これど。昔おぼしうる此對面より。さ世のこともとを
りぬ心ちして。え心づよくもまてなし給いずる法
らうくしくつうちつしくて。一うるなしぬ世
のつましさをも。衣をもさひこぶれて。(なげ)歎きがら
まて地し給はしさちどと(ほん)そしじめくらんよりも
ゆんつしく衣まておけゆくもいと口おしくて。む

ゆんつくしく衣にておけゆくもいと口ゐしらて心
結りん毛もあるしおさゆしけのくゞあるぬそこにもも
ちどりのこゑもいとうらくあり。茲もこれちゆ
ゑて名称かすめる猶のおさ緑なる木立昔ふぢの裏
志結しけびのことありそんうしと覚し出るにとし
月の積ゆるけり程もそのありのことかきつゞけ
あそれにおゆさる中納言の君のこゑりをくるとて
兼ぞをしあけるに立ぬりあて。この君よいかに
深けん夜にかれえあるぬこゑそふ見ひにこそいか
でかこのかげいたちもあるべきとおりおくいで
がてに覚しやすしひたり山ざいよりさし出る
日のもちやかるにさしあひめもかくやく心ち

すれば さ夜のうちなくねびくらし 卫ぬくるれけらひ
などをめづらしく行へてもこまるに ましてよれ
つまなしずおぼゆれば さるうちまてもすぐりこ 勝ノ
まりまし給いざらん れこゝやげんまも 恨(うぎり)あらて
きもことまらなれ給こともなりしを 如(熟れ)こゝやの
よろげに心をつくしなひ よしぬ世のさはぎる
うらぐしきれ名さへひぐきて やこましよろど
たひ出しる 名称おぼく 知りぬらん れ物語のとぢ 若
まはげるのうりおしをまはしきつぎなめるを
はしを心にえまうをさせ給まじく こゝらの人
めもいとゆそうしくつましれば やうく 紀ノ

あぐりゆくまこころあはたしくて、ちうのとまれ
車さしよをたる。人ども悪びてこはげくりさこも。
人めして、かれさ紀ありたる茶一枝おしをこまへり
志げこしも志ぬ物をこりずまま男をなげし
ぐさやどれ茶浪いといたくおぼしつづしひてより
ねぬへるを心ぐるしうこなる。如君も今更ありいと
つましく。さ面ぐまさひこぐれぬへるり。茶乃
かげいちをなけりしくて
男をなげんかちもまことの渕ちなしでかけじ
やさしうこりずまのちまこ

いとけなやかなるれふるまひをうちあがしも
ゆるさぬことなりおぼしあがし世さもなの
かるかぬこゝろまゝや。いとよくかたらひをきて出
給。そのかたも人よりこよなく心とめておもふ人
なし。れ心ざしあがし。たけかなてやまし。れあら
らひまは。いつでか衣もすくあらん。いうじく悪び
いりあへるれねくれの夜を。待うけて。女(紫人)恋さ
ぶらあらんと心えあへれど。おぼめしくもて
あしておいす。中々うちふすべあどしあへらんより
も心ぐるしく。あどかくしてもこゝろあらあへらんと
おぼさるれば。おりしよりけるふるきちぎりをのこ。

あがき世をかけて冥る給。かんの君の御ことも。まして
もしすべきなるねど。いましへのことも立り(紫)なんれば。
まれ(源行)まはおしみど。抱ぐしまもつかなり。川る對面
なん。御りあるこちする。いかぞひとめとがめあか
まじくもてかくして。いま一たびもとかくしひ
きこえ給。うちつけひて今めしくも。なかへ分法
ありさ海れ。昔を今まあしこめくもへなほど。中ぞら
なる身のこめくるしくとて。さすがに泪ぐミなへ分。
まこのいとらうたげまこゆるに。かう(源行)心やすかしぬ
御かしきこそくるしけれ。こゞおひしかまひきつこ
などしてをしへたまへ。滿(てぞ)あるべくもなしかし

こゝろぬとぞいはずまこそありはけつれこゝろあれとて
よろづに世のことゝり結縁に。おもふごともえのうし
結びず姫めり。家(女三)の北方みも。(源ノ)ところゑりかへり結い
思ひ(紫を)らへきこしつおりしますゝ。姫(女三)宮はあまとも
おぼしこゝぬをれば。うしろそぞもぞ。やむりはず
こゝてけるげ(女三ノ)りしうしあやにこし結ぶしころすしぐ。
そあるいもはして心ぐるしうたへくに袖。おぼひらける(女三との夜語と云々)
うけくしこゝにておそびぐさるゝもひこさこしなんへり。
ありつがの北(明石姫)方はうちもへえあるて結びず。れいと
まれ宵がくれば心やすくあるひうまへり(明石姫ふ)けりくされ
こゝろよいとくろしくのこおぼしうり夜ごろあや

ましくし給ひ。とこゝにもゆかしきさて給ひ申ぞ。いと
目りあしとおぼせ。地 ゑづくしきさ 懐姓之 の御こゝち
まぞ申けり。又いとあえかなる御ほどに。いとゆくし
くぞこれもくおぼすらんかし。かうしてまぞ
ゐへり。姫 女三 家のおりしますおとゞのひんがしおもて
に。御方 いまつくひたり。おりしの御方。今は御身に
そひて出入給も。おしまほしきされすくをありし。
夜いのうへ 紫 しなくにつゝりて。對面し給ひいでに。
ひめ 女三 こやまも中の戸あけてきこえん。かねてより
もさやうにしひしかど。ついでなきにいつましきを。
かゝおりにゆかしなれど。ゆやすくなんあるべきと

かるかりは四九なれど。心やすくなんあるべきと
おとゞは男しなへど。うちゑえて。詞しかやうなるは
うるしひまこそいあなれ。いとおさなげは抽し給
めるを。うしろやすくとしへなしなへうと。ゆるし
きこえ給。女三 紫ひ 家よりも。おしの君のちづしげにてまじ
らひんをおぼさば。はぐしすましひさいくろひて
おもする。夜ぐひあしじとこえしうまへ。おとゞも 源
女三 家のはうるはいくりなて。女 源詞 かるかれ基り給ふ
紫 人の。紫 志げいさ 相つがのよう 以右姫と 洋系舎は對面をんとていでゝろいいでは。
ちづさ男しさをまほしげはもれすめるを。ゆる
してうるしひなへ心などいいとよさ人なり。まうぐ
ひくしてはあそびがるさはもうさなるしず

なんなど男ゝ給。女三詞もづしうこそいあしめ。何ぞすをゝ
こさこえんと。おひしらなのおふ。人源詞のいしへいことゝ
ゝるがひてこそいぞし出め。へぐてをさてなまて
なしおひそと。こまうなをしへ男ゝ給。れん中うついし
ふてゐしおへとおぼしてあまりな。何心なきれ女三ノ有様を。
紫ノこあしいされんもちづしくあぢきなけれど。紫ノさ
の給いんを。心へぐそんもあいなしと。ぞなりぬり。
紫基はかくいでこちなどしこまふまれかし。れん
よりかこの人やいあるべき。身の程のまれちゝなさ
ゝ夜をこしをさなりこゝろぢゝりこそあしめなど。ぬひ
つぐけしれてうちなぐめ給。紫手なしひなどするまも。

紫ノ上三十七

とのゞりかことも。御おもむけのすぢのまうく
ることを。さらがひさまはおもふとおもひながらと。
こゝろぞおぼしまして。院ゝりのまで。家女流乃
ゐあもじのれおりさ海どもなど。うけたまふもおりすう
かれど。さ海ぐゝありのあへるれ教えうけしそうも。
年ごろめあれのあへるの人の御けろけあもんがいと
くおどろかるべきさまもおもしろきを。おぼえぐひあく
こそならとこゝのふ。おりけるきことどもありうしおもへる限
けるうちもゝしげまとくのひゝるまそひそ。むらな
やうさいまめしく。さひめ海めさくろ。さ海ぐの
かりもこりおつめ。なそでこきこりまこゑ給ふこそ

よりことしはまさり。此日よりはふも光づくしく。
つれはめるれぬさ海のまゝまへるを。いつぞくく
志もありなんとおぼせ。紫ノうちとけしらつゝ此手習を。
硯(すゞり)のまゝまさしいれなへれど。源つけなて。ひさ人
しこなふ。手などれいとつぎとも。ぞ手(ぞ)とこそで。
らうくしくうけくしげまうさなへり
紫 男はちらく所やこゝぬらんこうまくは春紫(あとぞ)の
山もうけろひはなり。とある所は。源ノ光とぐめなて
源 水鳥の春紫は夏もかもしぬを萩(ちぎ)のまゝこそ
氣色ことなれ。おどかさそへつすさひ給。紫ノふしとは
みれて心ぐるしきは氣色のまゝまはをのづし

ありつゝみゆるを、せうとちうくけちうきまへるも、旨ぐるく
哀まおぼさる。（源ノ）今夜はいづくにもれいと侮ありぬ（地）（女三と紫とさいめ人之）
べかれば、俊母びごたちいとよりおくておまゐり。（源）（胱月へ之）
（源ハ）いとあかまじきこと、いうかうじくおぼしみへするも。
かたはらいたり。書きの内方はたちのちくましるも。（明石姫ム）（紫）
（紫）はれかるにをせば、むつましう袖ましうれこきつておへり。
いとうたくしげまおとあすびまさりのおへりを、心隔て（紫ム へだて）
かるしとこちはり給れ、物紙なども、いとなつかしく
実つましおして、かれとあけて、家まも対面し（女三）
おへり。いと、おちさまげまのこみえおへば、心やすくて。
おとされくしちくおやめきくるさ侮ま、昔の人まうち（女三ノ御母ハ紫ノいとこ）

をも君(ぶれ)男と給。中納言(女三ノめのとこ)のめのとといふ石(めし)出て。(陰門)おな
じかぶしを君○男ゆれば。かうじけなけれど。(女三を化人)見るぬ
さ海(とはおもはぬとこ)まさてさすれど。いでなくて給りつるを。今
よりはうとからず。(紫ノ方を云)おなしなどまも抱しまてをこ
ころんことをば。おごろかしなども抱しこ海りん
なん。うれしかるべきなどの給へば。(めのと詞)これもしきれ
かげどもは。さ海ぐしまをられ男まて。心ぼそげま
おりしますめるを。かうれゆるし給るめれば。ます
ことなくなんさふまへられける。そむきまひまし
(年)うへのれころむけもらぐかくなんれ心へぶて男し
給ひ。おぶつもけなきれ省稿をも。むぐしこまりし給

給ぶすぶつもけなきれ省信をもたぐてこまりしを
ゐべくぞ給りしうちくまもさちんこれこ罵ゝを
給しなどきこゑ。いとかたじけなかりしれ（朱ノ）をうう
そこのうちハいつぞとのこゝひ給れど給ぶまつけ
てもかぶなしぬ身なんうちおしかりかりと。やまと
らうまをとなびうけもひまて。家（女三）まもれ心まつき
ゐべく。忍などのことひねなのすてがたきさ海。まか
やうまきこしゐへバげ（女三ん）いとまく心よげなる人
かれと。おさなきれこうちまハうちとけゐへり。さて（地）
のちハつねまれふこゝりよひなどして。おりしさ
おそびまぎなどまつけても。うとかしぶ罵しかりし
給。世中の人もおのなうかぶりまぬるあたりの

ことはいひあつふまれなれば、ちじ先川ゐたる基
のうへ(法)いりまおぼすらん。れおぼしいとこのうし
ぶのやうまはおもをじ。すうしはをとりなんなどく
いひけるを、今すうしふるさ(源ノ)れ心ざし。かくてしも
まさるさ間なるを、それまつけてもまゐやまゐらず
いふんどあるまかくまくげなくさへきこしうもし
なへばことなをとりてめやすくなんなりける。神無月に
基のうへ(法)院(源)のれ宴に。さが賢くれ堂(ごう)りて。茶師(やくし)
佛(かけく)供養(やう)じなり給。いかめしきことはをちこ(源ノ)にいさゐ
中なへば。志のびやかまとおぼし垂てゝり。仏神(かけ)(しやう)
ぶらこぢまのこくのへ。まことの極樂(ごくらく)でもひやうゐ。寵勝(さいそう)

ぢこぢしのこくのへ、おとの極楽そしひやうの寂勝

王綬（まうきやうこん）金剛般若（ぐうたん）、寿命経（ふやせ）などいとゆゑけきれ初（めの）望也。

上遊戸いとおほく集りぬへり。こゝろのき所面白く

いたんかゝなく、紅葉のうげ、まけりのべの程よ望

もじめて、こもれあるよ。かゝへいこをひあけまる

ぬふあるべし。裏がれけるれる望ぢしのまくに、馬

車のりちぶをとしげくひぐきたり。こずきやう

我もくとれ（花ちる時花ちどこ）かゝぐいるめしくきさせぬふ。廿三日

をれ（涼ノ）年尺の日にて、この院（六条院ノ事）いかくすき所なく

つどひ（分中云）こまへうちに、我（紫ノ）れけるしの所とおぼして、

二条院にてそのれまうけいきさせ給。れさうぞくを

もじめ、大かゝのことぐもし。これ（紫）こちゝりのこ

志ぬふを。此方ぐもさうべきことぞ。見けつて。のぞ見
つうまつり給。毎いどもハ人の爲ニ志ふるをも
らひて。爰ぞべ詔大夫院目志もべまでのまうけ。
いかめしくきさせぬへり。志ん爰のもちちいでを。
例の志つゝひてらそんの倚子ニてゝり。おとゞの
西のまゝ。れぞのつく志十二ニてく。夜冬のれよそひ。
れふす夜ぬど例のごとく。黒のおやのおほひども。
うかりしくえしけるりて。うちの心ハおしもおもず。
おまへにをさき地のつく志ふるつ。うしのらしすそ
ごのおほひしゝり。かざしの甚もぢんのけそく。
いがきの雪。銀の枝にぬるゝ心ぢんへぬど。御景舎乃
れあづりまて。おしの此方のきさせしまへる。ゆへ

ゞ田の鳥・狼の枝にねぐる心ぞへなど・渾景舎乃
れあづりまて・おしの此方のきさせこまへる・ゆへ
ゆく心ことなり・うしろの此屏風四帖も・或ハ文
なんきさせ治ける・いとじく川らして・前の四季の絵
おれどめづしきをんすい・渉などめなれど面白
し・ふのうべにそへて・をさ袖のこづしふさよろひ
こそく・れでうどぐも・れいのことなり・こちまこの日さ
しに・上ぎり・左右の大臣・或ハ文をりじめなりて
つぎくいまして・兼給もぬひとなし・舞其外
さうに・采人のひしぎりうちて・ましひんぐしにどん
ぶさ八十ぐ・ろくのうしひつ四十つゞそてこそり・
ひけじの時ぎりに・采人まいるまんざいらく

けうぢやうなど(まひ)舞て、日暮なる程に、こ海のらん
ちやうしてらくそんのまひ出さるほど、れつ日の
めなれぬまひのさ海なれば、まひもつるほどに、(猶夕)
中納言(柏)清心等なりて、いりあやをほのるまひて、
紅葉のうげに入ぬる名殘、あるすけうありと人々
なげしうす

いましへの朱雀院の行幸(和泉の賀ノ事)り。青海波(せいかいは)のいうじ
かりし夕(ゆふべ)新しひ出給人ども。撞(タ)中納言。清(柏)つ塔
のまさをとしず立つぐさ給りけり。世々のおぼく
首様かたちよういなども。おさくをとしず。けうさ
くしねいやくすくこそてさへこそなどこそひの程とも
かぞへて。なをさらべこさまて。昔よりかくたちつぐさ
さられなりしひなりかりとめでたくしふ。あるじの
院(源ん)も。衣は涙ぐましく。見し出しくことだ。おほ
かり。殿はいりて。余人どもまかりいづ。小の政(まんじこう)取乃
別当(べこう)ども。人ごひさねて。おくのかしひつまよりて。
ひどけづとりてつざくこまふ。しろさ柏ども紙

ひどけづとりてつざくしまふ。しろさ地ども紙
しれぐかづきて。山ぎはより池のつゝみ通り程の
よそめは。乎年をかねてあそぶ。霧(つる)の毛衣(けごろも)まおもひ
まがへらる。はあそびもじまりて。又いとおもしろ
し。はことじもは。其家よりぞとくのへさを給ける。
東籠院よりはたりまいれるびは。こさん(琴)。内(冷)より給ひ
ぬへるさうのはことなど。これ昔おぼしろものくね
どもまて。めづらしくかきあまをぬへるなり。何(源ん)の
おりまも通りしすのはありさ由。うちはたりなど
おぼしいでらる。右の君の家(前つが)おりをましかば。かゝる
はなぞ。親しそすゝつゝまつらましがおまぶ
まつけてかはうろざしをもえしなりけんと。あるぞ

くちおしくのみさひ出ぬる給うちにも右家の
おりしまさぬことをおなじとおもはんおくさう
ざうさくおぼさるゝに此院の御ことをぞ御の詠
あさ夜のしこまりをつくしても、えこをなしぬを
よとしもあるぬうちし給も、ことしいこ右此
聖ことつけて、ゆきなどもあるべくおぼし
をきてこれど、世中の日づらひなんこと、さしに
をさせ給まじくなんと、いちびゝ給こと、ふびゝに
成ぬれば口おしくおぼしとまりぬ、さまたの女日
あまりの程に、中家まうでさせぬてことしの御りの
此いのりに、なしの京の七だちに此御經ぬ此四千

れいのりは、なしの系の七だちに、れ編纏ぬれ四千

ぶん。ぶちうき都の四十寺は、きぬ四百辻をつうちて
をさせ給。あがうきれもぐくしを見しきりなぶら。何
ぶりにつけてかはかうきれ心ざしをもあらりし。れ
らんぜさせ給ちんとてらく家もくれ恩のおもを
まし。れこめれ心ざしをもこりそんおぼすは。かく
あるがちは。おぼやけにもきてくんさせこまんぞ。
るだおぼくとぐめさせぬひつ。四十の葉といふ
ことは。ささぐをきて給ふにも給りのよもひ久し
きこめしなんすくなりけるを。此度はなをよれひぐ
きとぐめさをぬて。おことにのちにこんこと紙
りぞんさをこまんとありけれど。おぼやけざ海にて

あ後いつといつあしくなんありけり。家のおりしまゝ
まちのさん敷はれつゝひなびてさ絶ぐよ
よるはかりけず。遊戸の様なり。大ゆうやうなるなり
らへて。えうちにけ。よるる女のきうぞく。斎宮
宮信。あうちさんぶちなど。くの世上人よいまうるさ
ほそあるが一さる。うぶしなどもそ。殊くまうこのふ
きうぞく。限なくきよらをつくしてえらさおぼひれ
もりなど。故前坊の御方様まで。つくりわり
よろしまる。哀よあん。かる世の一門の物とえ何
限いぶれいどひまいり。はかなくあんあやしむし
物後まゑ。物えろ世るけをりしるぞし
ゝりけるめれど。つとうかさくてよろしてされあすく

ごけるめれど、いとうるさくて、こちらさき此ありし
ひのことゞもは、えぞうぞへあへ侍しぬや。冷んうちよは
おぼしそめてしことぞを、ひげまやいとて、中納言
まぞつけさせまひてげる。そこ此の右大将やまひ出て、
ぢく給けるを、この中納言は、此聟の程よろこびくそ
へんと、そしめして、俄にあまきをまけ、院もよろこび
聞しさせ給物ゝ、いとかく俄にりおまる院なるん。
いちはやき心ちし侍るとひがしの給うしさらの
まちは此しつゝひまうけぬて、かくろへうやうは
しあしぬへれど、かふはあをことかるまゝしる
まさりて、東の饗ぬども、蔵づかさ穀倉院より。

つうまつしをのへり。とんぢさちど。おほやけざ海
まて。頭中将。宣旨(せんじ)承りて。こゝろちの人。左右のおとゞ
大納言ふたり。中納言三人。宰相の人。殿上人。右の
地(冷)。妻家。院(朱)のこりすくなし。おましれでうどぞなどは。
おほきおとゞ(以)くもしく承りて。つうまつしをのへり。
(冷)ふは作ぶすありて。(以)つうまつりのへり。院(源)をいと
りしこくおぼろきものて。(源)れぞよつきのぬ。もや乃
おましよむかへて。(以)おとゞの地産ありいとさよしな
もれくしくふとりて。これおとゞぞ。今さうりの
しうとくとはこしのへる。おとゞの院(源)は。れいと
つきの源氏の君よこし給。れ。麻風(よだう)。宮枯(よだう)。うち(冷)の

けるさまをめへるうしのあやのうすぎんり。志る
志のさ後ちなど。そろかちなんやいおもしろき春秋の
けんり志ちなどよりも。この此屏風のすゑつくれうや
くさまは。めもをよぼず。たひちしさへめでたく
ちんありけり。並物のこづしひさまれ。ふき物ちなど。
蔵人所より給りめへり。大将の此いさ御ひも。いと
いみしく。此給はされば。うちそへて。かふ志作法
いとことあり。此馬四十疋。左右のるづつき。六清府の
官人。かこよりつぎくはひきとくのふり程。日られ
もてぬ。れいの万歳。采賀堂連ちなどいふ舞。氣色計
まひて。おとゞのひたりめへるまめづしくもて

もやしのへるはあそびは。これ人心をいれのへ申
びもく。例の無量の家。何ぞすりも世ようさき抽乃
上手ぶにおかして。いとにおし。源おまへにきんのはこと。
はとぐ和琴ひき給。源ノこしごろそひのひにけるは
ことのきくおしにや。いとゆうる衣におぼさる
れば。きんもはをおきくかくし給はず。いとじき
れどもいづ。昔のは抽代どもなどいできて。いまもる
かるはおしひに。いづるかりつけても。さて
かよひのべきはむつびなど。心よく思ひなて。はこさ
あまるたび来りて。抽の面白さもとぐこゆりなく。は
ゑひなきどもえとじめ給はず。はへりはたく。

すぐれたる和琴一このゝ絃ゝ座留ゟへて、志ゝこん
のきこひとよろひまうくの御たぐひ(まさえ)、このきはの女(まさ之)
あざりれて、れ車にとめて、なれかよひむまじきを
むかへそうして、古のつきども、故院のかくしての
ちか六条の官人(くわんにん)のたくみだ、大将(夕)のふかき心(源ノ)とぞ
みていかめしうこそはあれば、いとびどしくめかへれど、
内(冷)・春宮・一院(朱)・后宮(秋好)つぎつぎのあれゆかりいかしき
猶いひしらずすぐしわたりつるにあれば、御家あり
まはめでたくあんあそばしける、大将(夕)のうち(源ノ孫子夕ダ成リテ)一ところ
おもてすがたきうとくしくまへなき心ちをしけど、
おまへの人はすぐれ、うへしこまゝ、人かうもうえる

おもやうに抱し給はも、かれまて水方の伊勢の
宮まで取との恨ふくいどミかけし給はん程乃れ
まくせどものひきゑしこゝろなん、さ海ぐなり
けり、その日のれさうぞくどもなどこゝろのうへ
なんしのひけり、裾ども大きのことをぞ、三条の
水方もいそぎ給めりし、折ふしは川音こゝろれ
いとなまうちくの抱のさよしをもこゝろにハ
こゝよそのことにのミ罪けり給をなまごとに
つけてかはかるもれくしきかぎにもまじらひ
給ハましとおぼしこゝろを、大将の君のれゆゑに
いとらくかずまへられなへり、源罕一ヶ之ぞしかへり思ふ

つぎのとし（明石姫の産ノ事）ちかづき給ぬれば正月朔日より
みずほうふだんにせさせ給ふ。寺ゞ社ゞ（てらやしろ）のいのり
もろ〳〵數（かず）もしらず。おとゞ（源氏）の君ゆゝしきことゞもをみ（葵ノ上の事）
てしかば。かゝるほどのこともいとおそろしく物す
おぼしたり。とのゝうへ（紫）などのさることもなき
まゝぬはくちおしくさう〴〵しき物からうれしく
おぼさるゝに。まだ（明石姫）いとあえかなるほどにていかゞ
おはせんとかねておぼしなげく。二月ばかり（比）より
よりおやみしく御（明石姫ノ）気色かはりてなやみ給ふころ
どもさはぐべし。陰陽師（おんやうじ）どもゝ家をかへてつゝ
しもぬべくすなれば外（ぐわい）のさしはなれたる

おぼつかなしとて、かれあしのれまちの中恵
基にはつかしなり給ふなるにはこゝにおぼきなるこれ
ふるゝ、らうどもなんめぐりてありけるに、此修法の
ぶんひまなくぬりて、いとじきがんざだけどひて
のくしたる、ぢく君この時にはつかすくをもこゝ由べき
ひざなめれば、いとじき心をつくし給、彼おぼ尾君も、
今はこよなきわげべくまてぞありけるし、此れを
さ面をこなるは夢の心ちして、いつしかと知り
ちかづきなれなる、としごろ、ぢく君はかうそひさふ
らひなへじ、昔のことなどまほにしもえしたしを
給はざりけるを、此おまぢ君よろこびにえたへぞ、こなり

ていと涓がちにあるめしきことゝもを、ほなるゝき
出つゝかゝりきても、初つゝもおやしくむ河かし
き人かれと、うちまもり給しかど、かゝる人ありと
ぢりハ泪のきゝをさめへれば、なつしくもてなし
めへり、むまれ(明石姫ノ尼忘河)のひしほどのこと、おとゝ(源)の君のかれ
浦(うら)におはしましたりしありさ間、今ハとて京へ
のぼり給しに、これもく心をまどハして、今ハ限
かぢりの頼りにこそハありかれと歎(なげ)かしきを、ゆ(明石姫)
君のかくひきこすけめへる由すくされ、いとゞしく
かなしきことゝ、ほろ〳〵となけば、げに(明石姫ハ)衣なりける
昔のことを、かくさうをざしましかば、おぼ河かなく

てもあぬべかりけりと思して、おぼき給心のうち
まはげがこはげまうけだりて、いうじかるべきくも
まはあらざりけるを、墓のうへ(墓)のはもてなしまこ
がれて、人のせへうさ海などもうたかまはあらぬ
ありけり、身をば又なき物にせひてこそ、家げうへの
ほどにもうたへの人にをばせひけち、こよなきころ
をどりをばしつれ、世人はしたくにいひ出るやうにも
きこえんかしなど、思し初(しり)もてぬ、たゞ君をばもと
よりかくすこし思しくたれるよぢとしりながら、
じまれ給かん程などをば、さる世ぢなれたるさうひ
にてなどもしり給はざりけり、いと(地)あまりおほとき

まてなどもきり給はざりけり。いとあまりおほとき
おへるけまこそはあやきくおぼくきりけること
ありや。皮入石の今は仙人の世にもきまぬやうにて
ねこなるなきく給も心ぐるしくなどかこぐに
きひこぐれおひぬいとゝ掬衣にあるめておりすりけ
かこ糸おひて日中のけかぢにこなるかなるより
糸つどひ掬さはがしくのゝきりにおまへにこと人も
さふらいず。尼ぞ取えていとちくさふらひ給。あな
こぐるしや。こゞかきけ事ひきこまてこそさふ
らひ給ちめ。風などさはがしくて。それげかしほそ
ろびのひまもあらんに。くすしなどやうのさ夜して。
いとさりすぎおへりやなど。なほかこちらいふく

せひかへりよしめきぞ（浮之）してふるまふとはおぼゆ
めれども（老もうく）ゆうくよこくもおぼくしかりなれば
おくとかるぶきてねたりさるはいとさいふぢかり
よもあらずし（尼ぶ云ノ）六十ぬ六のほどよりおますがく
いとかぐらかるおてあるさ面してめいやくかる
あきまれたるなしきれおやまく昔せひ出たるさ面
なれば（鳴石云）むはうちつぶれて（詞）こぐいのひがことぐもや
侍つらんよくこのよれほかのやうなるひがおぼし
どもよとりまぞつくおやしき昔のことぐもいで
まうでさつらんもや夢の心ちこそ志侍れとうち
ほくゑこそこなりぬへば（姫志ノ）いとあ面めし記ちかく

まてれいかりもいくしづまり。抽おぼしこうさ海
まこし給。ワガ子（ゆゑん）ともおぼし給ひず。かくじけるきる。
いとおしきことぞ罪しなて。おぼしこぶなく
まや。今はかぎりと（姫宮私をも如給てとく）此位をきたるの給ちん世る。
きたしもしらきんとこそおもへ。口おしくおぼし
すのべきまほあらるどいとくおしくこころをとり
し給らんとおぼ也。此かぢもてゝまかでぬるに。此（ゆゑ）
ゆゑ抽などちくまうちひなし。これ（討）ぞうりをぶると
いと心ぐるしげにさひて（姫宮へ）きこしぬふ。あま君をいと
めでこうなのくしくこまつまるも。洞はえとぐ
めず。かかはしきて。くちつきなどはこぐるしくひろ

ぐりこれど。まこのわたりうちしぐれてひそこね
たり。あなかくさしいこと。めぐいすれど。実もいわず
老の語りひあり。漏に立出て志ほたるゝ。何ま紙
維かさがめん。昔の世にもかやうなるゝ人も。何こ
ゆうされてなん侍けりとぞ也。此すぐりあるうこゝに
垣たるゝあま紙あるゝぢのしるべにてこゞるを
こゞやさ面の苔やを。此方もえ思ひ給ひで。打絶ぬ
世を拝てありしの漏にすむ人も心のやこハ
たるゝしもとじ。あどこゝてしまぐらしし給。別けん
曉のことも。夏のうちにおぼし出られぬをうち
おしくもありけるゝとおぼす。やうひの十余日の

おしくもありけるなとおぼすやよひの十余日の
ほどまさいとうまむまれぬ。かもてはおどろく
しくおぼしさはぎしかど。いとくなやこ給ことも
なくて。おとこ(ワ女)こゝまさへおはすれば。限なくおぼす
さ両まて。(源)おとゞも此心おちゐぬ。こゝるはうれ
の方まて。こゝけぢうき程なるに。いかしきれうぶ
やしなひなどのうちしきり。ひゞきよそほしき当様。
げまかひあるうしと。尤恵のさめまはこしこれど。
ぞしきなきやうなれば。(紫の方)つゝり給なんとて。基の
(紫)うへも(以右歩へ)つゝりぬへり。しろきはさうぞくしまて。人の
(おや)親のさて。つゝ女をつくいぐきてゐぬへるさ両。いと
おかし。(紫は以子をうこ給ぬこと)こゝろうかうことしり給はず。人のうへり

てもうるしひ給ひまゐ。いとめづらかまうけしと
ちひ罪しぬへり。むつかしげまおかすう程を。こえぞ
いづきさうぬへが。まことのをぞぞこえ。こゞまゐを
なりて。此ゆどれてあつかひなどを。けうまつり
給。基家の宣旨なり内侍のすけぞけうまつり。此
むかへゆまおりこちぬへうも。いと衣まうちくの
こともほのちりこうま。すこしこゝかなしぞいと
おしかしましを。おさましくけるかく。げまかう
歎こともまれし給けりひとかなとこそこも。その
ほどのぞしこゝなどもまゐびこそんなり。いとさし
なりや。六日といつま。れいのおとゞなりけるぬ。

ありや。六日といつまれいのおとゞありつたり。

七日の夜。うちよりもれうぶやしなひのことあり。
年薩院のくせをすてゝおはしまして。れかたへも
まや。義人所より。弘弁。宣旨（せんじ）（ごけ）（ゑ）。前りて。めづらかなるさ海
まつうまつれり。禄（ろく）のきぬなど。又中（秋好）宮の御方よりも。
おほやけごとまいたちまさり。いかめしくきさせ給。
つぎくのこゝろ。大臣の家々。その此のいとなゝ
まて。我もくときらをつくしてつうまつり給。
おとゞ（源）の君もこの程のことゞもは。例のやうにも
ことそぐを給ひて。世になくひゞきこちたき程に。
内々の御所めしくこ海かなるこやびしまつりび
つゝふべきふしもめもとまらず。ぬまかるも。おとゞ（源）の

志も。ワ家を程なくいづきなりなて。大将(源詞)のあまる
まうけるなるを。今までこそぬがうしめしさるよ。うく
らうさき人なそへなりさるとうけてこそて
ぬふいこといりありや。目ぐるものをひきのぶる
やうにおすすけさまふ。れめれとなど心しらぬも
とこるめさで。さふしふ中ましれ心をぐれさる
かぎりをえりて。つうまつらをぬふ。れ(昭名)るの れ心
をきてのらうしくしく。けるかくおほとるものの。
さるべきるまはひがして。りくらうまもうけ
ぐしぬなどを。ほめぬひとなし。さいのうへ(紫)はまほ
なしひどえ(昭名)しかりしなて。さづりゆるしなく。えし

たりしかど今は家のれとくにいとむつましく
やんごとなくおぼしぬよたりちごうけたしし
ぬふれ心にておまがけちどれまづしけたりそく
たりおいすりもいとワかくし明暮はれりしづ
きにてすづし給かれこぞいのあまぎはまう家を
えたろのどかにこましぬなんおかず見しけり中ゝ
こまりそめて恋きてゆかにぞ命もえたふまじか
めり度あしにもかゝ家れくとけたへきて
きりひじ里心ちにもいとうれしく見しかれば いま
なんは世のきりひをこうろやすくゆきもちるべきと
男子どもにいひて此家をがちになしておたり乃

田ちどやうの地にこれそのものことに志をて、この
国のおくの郡に、人もかよひがたく、かつき山あるを
としごろに志めをきちがしかしこゝにこもりなん
のち、まるひとにはこしたらべきにもあらずと
ちひて、ぞすくしおぼつちきことありかれば、いま
までなげしへかるを、今にさりたと弘誓をこれに
よてなんうけろひけり、このちかきとしごろとなり
ていふことなることなくて、ひともかよいしなら
ざりつ、これよりくだし給へだりにけてなん、
一ぐりまでも、おまぎにさるべきおかしのことを
かよひけり、忠もなるに世のとぢめにかしうきて

うるまなれぬへり。このうしぬ。おなじ世中。志
うちまかぐしひ侍つれど。なまかはかくなりし。男を
かへうるやうに心ぬへなし。けく。させうことなる
恨は。たゞしうけ。海ひしぎ。かれ父ミぬへるしめれ
いとまいりて。念仏もけぶいするやうにやくなうて
なん。此きうそこもなしぬをつてにうけ給つれど。
若ぶ恵は垂ぶ家に来ぬて。おとこ家生れぬへりよしを
なん。かく悦侍。まゆへは。こづくしうくつるなる
山がしの男に。今更にこれこのさうえをこしふにも
侍しぎ。さしまし。才の年ぶ。心ぎるなく。六時の川とめ
まも。ぶ此ことをこころにかけて。蓮の上のつゆ乃

ねがひをばさし垂てあんねんじまりし。我おもと
むまれ給ひんとしそのとしの二月の千夜の夏る
ましやうこづくしすゑの山を右のあるさくげこり。
山のたゝかり。月日の光さやかなさし出て。世紙
てしまふ。こづくしは山のしもの。げまりくれて。その
光にあたしぐ。山をばひろき海にうんべきさて。おい
さき毎にのりて。西の方をさしてこぎ出とあんと
侍し。夏光て船よりかずあるしぬ身にこのむ所は
いできあがし。何ごとにつけてかさりいかめしき
ことをば待いでんと。心のうちにせひ侍しをその比
よりもしまれ給ましこるぞくの方れ。ふゑをこ侍し
まも。まる内教の心を。鈴の中にも。夏を信じんべき

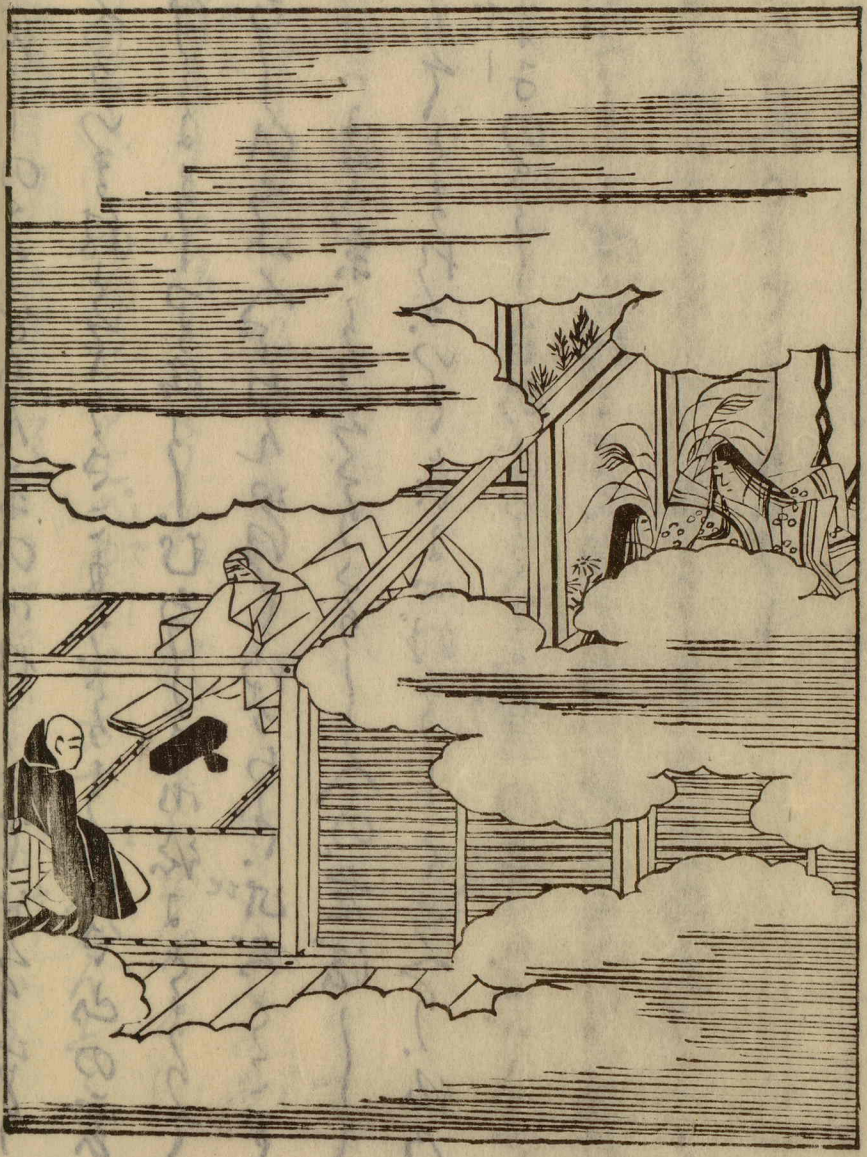
まも、まゝ、内教の心を、弱か中にも、夏を信じんべき
こと、おほく侍しかば、いやしきかところのうちにも、
うたじけなくさひいたづきなりしかど、ちから
をよぶらぬ力にさひ、ゆへかねてなん、かゝる所にをも
むき侍りし、又この国のことにさづき侍て、老の浪
さしに立んとじとさひとぢめて、此浦にさしば
侍し程も、[illegible]をこのむことにさ[illegible]侍しかば
なん、心ひとつに、おほくの[illegible]をこそ侍し、そうへり
[illegible]いしかにさひのごと、時にあひ、[illegible]若[illegible]くにの
さくと[illegible]て、わがひこち結ん世に、住吉の社を
そじめそくし[illegible]へさしに何ぞをかうたがひ侍

んこのひとつのしひちりき世まうまひ侍ぬれば云
りまはしの方十万億の国へぞてうる九品のうへ志
のぞこうるがひなく必侍ぬれば今はんぬくむかふる
蓮を侍侍る程その夕まで紀草きよきやまの糸
まてひとめ侍らんとてなん まうりいりぬる
入道ひかりいでん曉ちかく必まかり今ぞこうしよの
ゆめがたりする とて月日かきたり 命終らん月日も
さしまなしきしめしそいはしへより人のそめ垂
けり衣にもなるやつれぬふ ただ親身は変化乃
もれと見しなして先法しのためには 功徳を
つくりぬへ びよれたれしうまそへても 後世を忘れ

ゆふかねがひ侍り所にぞまいたり侍ならば必まさ
對面(さいめん)は侍りなん。さばの升(ぶり)のきしまいたりて。とく
あひこんとをおぼせ。さてかれ社にてはつめたる
執文(ぐんかん)どもを。おぼさなるぢんのふぞくこゝ。ふむじ
こめてなりぬへり。あまぞこゝにはゝとぐまうらぜ。
さぐこの月の十四日になん。菓のいほ里まうり里
ともなれて。ふるさ山に入侍ぬるかひなき力をば。今面
おぼかこゝにもをし(施かり)侍りなん。そこにはれさひしやう
なるれ世をまち出ぬへ。おさしらなる所にて。まさ
對面はありなんとのこゝあり。尼君此ふこをこそ。かれ
つるひの大徳(ざいとこ)にとへば。此れ文出(入ろ)ぬて。三日といふに

なん。彼こえたるこゑまうけるひ給ふし。なまがしら
もかれれをくりまふもとまでいさふひしかど。
これ久しなて。僧一人ましまし二人なん。れ供(とも)ま
さふしまを給。今いとよをそむき給しありを。かな
しきとぢめとせふたまへしかど。のこり侍かり。
としげをこなひのひまぐまよりふしながしかき
なし給しさんのれことびまさりよをなて。
かいさしべなつて。伝ままりやしなてなん。れ堂(ミどう)
ま世(施入)より志給しさしぬものどもく。おほくは
なりなて。まゐりをなん。れ弟子(ミでし)ガ六十余人(ま)なん。志る
志き限さふしひけ。行まつけて。これ所分(そぶん)志なて。

なほしのうりをなん。京のれれうとてをくりなり
ぬへり。いまはとてうきこもり。さうさうけさ山の雲
うすゝまじ。つまはしむなしきれ給ふとまりて。
うなしひさふ人ぐなんおほく給うなど。比だとこを
けらいまて。京よりくぐりうりし人の。老法しゝ
ありてとまれり。いと哀に心ばそしとせへり。仏乃
れ弟子のさしきひじつまぐる。鷲の峯をばうど
うどしうぎこれを買ひながら。れ薪つきけりよれ
まどひいふつまけりを。まして尼君のなしと
せひぬへることうぎりなし



此(以名)れなるはこゝろのおとゞにおかすなを、(尼志ノ)かゝれをうそこゝなん
あるとまゐれば、(以名)悪びてつゝりぬへり、をもくしく身をもて
なして、おぼろけなるではかゝひあひこゝのふこともなる
さ候、衣なることなんと思ひて、おぼつゝなければうち
悪びてゆしぬへるに、(尼志ノ)いとゞいとゞくなるしげなるなし
さまてねぬへり、(以名ノ)火ちかくさりこゝをて、(ム)此文をこゝのふに
げにきさきとめん方ぞなりけるよその人はなるともめ
とゞむまじきことのまづ昔こさしかるのことも出、忘し
とせひつゝり治心にはあひこゝでゐてぬるにこそいと
こゝのふにいとゞくいふひなしと、間をえをきとめず、此
音ぐるりをかれはゆくさ紀これもしくさしばひが心にて、

我身をさしもあるまじきゝ面にあこうしぬふと
中ばせひこゞよはれしとゝいふくちゝなきこゝ
これミをかけて心ごゝく抱き給ふなりと。うけぐ
せひあたをぬふ。あまごゝひさしくこゝめしひて。
君の（尾宮詞）れとくにはうれしくおもごゝさきことをも。
身にあまりてなしびなくせ侍り。あれにいづきさ
せひもせぐれてこそ侍れ。数（かず）なしぬすまてもながし
へし数をすてゝ。うしこゝにせげこゝぬしなごゝに。世
人にこゞひこゝすくをこゝもあるれとせひ侍し
うど。いけゝ世にもしもなれ。べごゝるべき中の契り
といせうけど。おなじ蓮（くちす）にすむべき宿の世の報（しの）に成

さへかけて、年月をゆしきて、俄(にはか)にかくいえしぬけこと出
きて、そむきなし世を立入りて行かひあらけことを
ふまり悦(ろうぶ)まれかしかるつるにはあげつるくかるしき
ことのうちそひてこゝぬをつゐにかくあひ、ぞ備(つぐて)なが
ら、此世を別ぬるなんにおしく、いえし行かせるへし時ぐる。
人にしぬ心ぞ人により世をもてひがむるやうなりし紙。
けるさどち料(しす)ゝなしひて、それくいまさなく契(ちぎり)をきて
がれべかるゝまいとかくこそ料ゝ行しがいかなれバかく
ゝくまちるき程なぐしかくて別ぬるんといひつゞけて、
いと哀にうちひそゝ語(ぬる)けるもいとじく泣(なき)て、人(詞)にす
ぐれてゆくさ紀のこともあげしずや、数なるぬ男にハ何

ぶすもけぎやうまひあるべきまもあらぬ抱うし衣ある
肖様ま如ぼつるてやうちんのこそ口おしられよる
げのことさうべき人（入道）の作るあとこそ見し給れさてこえ
こまり給ふべ世中もさぶめるさうまやがてきし給ふべ
ひなくなんとて衣もすぐし衣ありことぐも紙いひあ
うし給ふ昨日も如（深）とぐの志のおなさ（姫志ノ方）まありとこ志のひ
てしと俄にまひかれこんもかうぐしきやうぬべし
身ひとつはなまぐりもせひとぐり給しぶかくそひのふ
作るあるどれいとおしきるなん心にまきて身をもて
なしまくうべきとて曉にくりけるりのぬ（尾志河）ぬ衣は
いかぐおりしますいでうこまうべきとてもなき

ぬ。今こそりなてん。女性の志もいとあはれにたるん。
あばし出門く罪しさせ給ひ。院もことれ門いでに。
もし世中おもふやうなしば。ゆくしきうひと
なれど。おまぎこそ程までなげしへ給はなんとの給
ひりさ。いつにあばしてことまりあらんとのこまへど。
又うらをこそ。いでやされバこそ。さ海ぐ多めし
なきすくきまこそ侍れとてよろこぶ。このふぐらこハ
もさきてまうのぼりなぬ。家よりとくまいりなべき
よしのこあれバ。かくあばしゑりことも望なる
かづしきことさへそひて。いつに心もとなくあば
らんと。宮のこものなて。門に家志のびてあらせ

なんのれうろづかひしまふれ息(明石組ん)所をれいと海
のうろやをうしぬようなて、うるかいでつり
しぶしあらまほしくおぼしうる(地)ほどなきれ身に
さうおそろしきこと紙しるまんれば、をうしおを
やを浮きりて、いうじくな海めしきれさ海し
まへり、(明石詞)うくうあしひがうくおかすう浮ど、いくろひ
まてこそいなど、(明石)れ方などい心ぐるしがり罪しの紙
(涼詞)おうぐいうやうしにおをやをてこしなり給ちんも
中にあくれなるべきつぎなりなどのうまふ、人海いの
(雲ノ上ノ方へ)うんなどのつうりなぬりなつうに、しめやうなりつり
(明石)れうに(姫君ノ)おまへに来りなて、これふぞこしきうしきしを

給ふ事は御ほうなひとてさをのふまでいとりうく
志て無て侍べかれど世中さぞめがるゝれば志ろ
めるさまなん行ぐすをもれ心とあげしうずまへ
ざらんこゝろ。ともうくもうゝるく必侍なが必しも
今ものとぢめをゆらんどしらべき身まも侍られば
私うけし心うせず侍る世まなん。うゝるきことをも
罪さきなくべく侍けるとしひ侍りて。むつかしく
あやしき給なれど。これもゆらんどよ。これは乱文(ぞうんかん)を
ちらさこぶしなどるをうをめて。かなしきさな
べからんありまゆらんじて。ぴうちのことぞもを
をさせ給へうとき人にはなもしさを給そ。かぞうと

こなりをきつれば、こづくしも世をそむき給なんと
しふこまへなりゆけば、よろづ心のどかりをおぼし
給しず、墓のうへの御心、をろかなおもひきこしさま
給ひ、いとあがたく抱き奉ふかき御気色をこ給れば、
男は、こまなくまさりて、ながき御世をもあらなん
とぞ、しる給ひ、もとより御男をそひ寄しさきんすし
つけても、つくましき男の程に給れば、ゆづりきこえ
そめ給ひしを、いとかうしも抱しこ侮りじと
なん、さしぜは、なほ紙よれつゝ、なほ、おもふ、へつゝり給
ひ、今はさしかたりさ紀うしろやすくしひなり
まて給りなど、いとおぼくきこえし給ひ、洞ぐこてきこ

おかすがくむつましうべきおまへまも（四名）づれ
うちとけぬさ海しまてぴりなく地つくしたる
さ海なりこのつゝの云（こゝぞ）紫いとうたてこゝくぼくげ
なるさ海をこゝちのくまがゝまてどしへ入れど
そうばゝあつぶへたる女六枚（まい）まさすがまうり（芋鉢）にいと
つくしたるまうきまへりいと（姫君ん）衣とおぼしてが
ひさいがゝのやうくぬれゆくがそぞめあてま
な海めし（源）慌ハ姫（女三）家の此方におかしけるを中の此
さうじよりかとつたりまへれバ（新文字）えしもひきうく
さぞが事とすくしひきよきて（四名）ぞづくしいたる
うくれまへり（源詞）ぴくまハおどろきまへりや時のまを

をしきひぎなりけりと罪しあへば、[illegible]（[illegible]）をぞこころは
いとへも罪し給ひ[illegible]ぐ、[illegible]（[illegible]）[illegible]（[illegible]と[illegible]へと）
給ひとをしき給ひ、[illegible]（[illegible]）あやしや、[illegible]（[illegible]）[illegible]（[illegible]）を
らうじなりて、ふところをさしまちなるぞまへ、
あつひ、へやまちなるぞきぬもこれぬしてぬ
ぎへがちなめりがろぐしくおどうくひてし
なり給ひ、こちらにひてりてこそこなりこ海はめと
のあへば、[illegible]（[illegible]）とうしてせひぐ海なきれとかれ、如ま
おりしまきんぐにおちらにてこなり給ひんこそ
よく待ひめ、まして男はうぎりなしと罪しさすれど、
心やすくおぼしあふ所ぞもふれまてもうやう

へぐそがましきことなさしがりきてしさせ給
そとしきてる給（深）うちつゝひて此（河）中（昭名と法ノ）どもまゐりをて。
ミもるちきしゆべきなくまゐ。備（つぎ）てく今はこれも
これもさしもるちさしらるどのゆふこそおさな
なれ。まづハかやうまもひ（昭名ノ）かくれて。つれなくいひ
おさしゆふめりしとて。此事をひきやまゐへ
れば。もや（昭名ノ称）の様（ちうち）よりかくまていときよげよこゝろ
もづしげるかさ波をて抱し給ありけるもこ（久ぐこ）を
まどひかくさんもさ波あしなれば。さておもするを。
なぞ（深河）のもこぞ。ふるさ心あらん。けさうべのながうこ
ようそ。ぶんじこめるる心ちこそすれとの給へば。

あなうらてや。いまめかしくなりかへしを治めれ
れ心ならひに。実しらぬやうなれすさひごとくを
こそ。時ぐいでくれとて。ほゝ思ふこゝろへれど。拙衰なり
けれかしきども。しらなれば。あやしとうちうる
ぶきゐへるさ海なれば。けつらいしくて。かれあしの
岩底より。悪びて。侍しれいのりの巻数。又まぐさしき
飢などの侍けるを。れこころにもしらせまるべき
ありあらば。れらんじをくべきやとて。侍るを。毎ぐ
今はついでなくて。なまかはあけさを治いんと。男ゑ
治まげに。衰なるべきありさ海ぞかしと。おぼしして
へかよをこなひまして。すゝゐひにこん。命なぐくて

こゝのとし代りともうつゝもこそよあらんかし。
世中はよしあしきといふの人とてころ
まも。この世はそこつるほどのつよさかよや
おん。かしこきかくこそあれいとゆへざりありけり。
さらば。さりけりや。さるをいくりかくさずは事定
ありし人の首従かれ。ひさしかりし此世をもよすれが今
またあはぬあれかし。ちるの心もこれあはぬ世かり
うらひすこしけるかとこそこし。が。去りて今ハ心
ぐるしき。ほぐし。君あく。ざひもあれはうらんなやか
やすくこ男なれば思ひていとあはましくこそと
入道ノ
の後。今ハかれ帰し一事ともすてし。翁の事とこかし ぬ

山まとちん罪侍ると罪ゆれば（涙詞）さしがそのゆいごん
なくはなさうそこハなくらし給や尾張いかりも
給ふん。おやこの中よりも。又さうさ海の（ちぎり）契もことま
こそ。ちふべそれとて。うち明ぐこまへり。さし乃川
もりま世中のありさ海をとらくおもひ志りゆく
まくまおやしく恋しくせひ出しるく人思れあり
さ海なれば。おうさちざりのなしひも。いかり哀
なるんなどのさまふ川いでま。此（袈裟）夏ぐうりもおぼし
あかすうこともやとせひて。いと（詞）おやさき。がんじ
とかいふやうなる。おとまもべめれど。此くんじと
どもべきふしもやまじ。是侍るとてなん。今ハとて

別ましかど猶こそあれハあり侍るもれなりかれ
とて、さ海よくうちなき給ひ涼りぬて、いと討しこく
なをほれぐしうしぎこそあるべかれ、まなども
もべて何ぞもワざというそくまたけべかるもけ
人のこゝぐ世ふるさの心をきてこそすくなり
かれ、かれ先祖（先ぞ）のおとゞハいとうしこくありがたく記
こゝろざしをつくして、おほやけまけうまけ事給
ける程に、もれしこゞひめありて、それむくひまかく
すゑハなきなりなど、ひといふめりしを、女子の
うたまつけられどかくていとつぎなしといふ
べきまはあしぬもそこしのをこなひのまるしま

こそいわしめなど。泪をしのごひ給ひ。この義の
ひとりよめとゞめ給。おやしくひがくしく。すぐろ
ことゝき心ざしありと。人もとがめまゝこれながらも
さるまじきふるまひをかりてもすかれとせひ
しことは。この兎の生れ給し時よ。ちぎりふかく
せひしりましかどめれまへにこゝぬあるされとは
なぼつるくこそせひひとりつれ。さしばかりなる
のこゝろておながちにはのぞこしなりけり。よこ
さ海にいうしきめをこゝろゞらひしも此人ひとりの
ためにこそあれ。つかはする乳(ぢん)なるゝろにせこし
けんとゆしられが心のうちとりながこゝろくさり

語つ。これハまたぐしてなるべきもの侍り。今まで
一 きゝしきしを侍らんと。女所（宮服志）まは罪し語。きつゝでは
いまはかくいかしへのことをもあどりきりぬひぬ
れバ。あるこの（紫ノ事）所心ぞ人をせろりはおぼしなすな。
もとよりさるべき中。えさしぬむつびよりも。よこ
さ夜の人のなげの衣をもかけ。ひとことのころゝを
あるハおぼろけのことにもあらぎ。ましてこゝに
などさかしひなれ語を。こゝろくもちじめれころ
ざしかもしぎ。おくねんぜにおもひきてしるを。
いかしへの世のことへ（継母ノ事）にも。さしそもうもべりハ
もぐくそげなれどらうくしきこゝどりあらんも

りしこそやうなれど。なほあやまりても。ワがこめ
継母など
ちこのうろゆがこころん人を。さもせひよしぶ。うら
まゝ子ノ
なりんこめも。ひきうへしあれは。いうぞかうら
まはと。つゝえがましきまも。せひちをうこともあら
べし。おぼろけの音の世のあぐなしぬ人ハ。こゞふ
人ノひなしこ
ふしぐもあれど。ひとりぐつゝなき時まはなの
づしもてなをすこめしどもあるべかんめり。さし
もあるまじさことよ。かどくしくもをつけ。あい
ぎやうなく。人をもてもなるゝ心あるもいとうら
とけがたく。せひぐ面なきワぐまなんあるべき
おほろはあしれど。人の心のとあるさ面。うるなをも

むかしをこゝろはゆへよしといひがたくこゝちかし
かしぬるしのこゝろざせおもへありこれをのく
えらるゝくわりてとゞ取あるくもあるなどおもひとり
さてしげうおもゝゝはおもひまめくしくえしひ
かゝもちんはいおりがくさきわざにあるんぐまうとの
うゐのくをうてまさことい、この藝(忠)をのこちん、これ
そぞおひしくあるへといふべうりけ家とあるん
おひ給ふ、ぶしとそて又おまりひくれそてぶれもしげ
あさもいとくちかしやとゞうりの給へり、(ぬれぎぬの心)かくへなむ
へざいおひやうれめし、(源氏 ぬれ衣)さてすてもの
ゆかしてかへし給めるをいとうくむつびかして。

このれうしろうをもおもひじ心にて抱しゐへなど
志のびやかるのゐふの給(岩河)もきれどいとありがたさ
れかしきを。こゝてまつつまゝる。明嘗のことゝろさま
きて侍る。めざ後しこさもれるなどおぼし。ゆゑ
さじらんにかうまでれんじしるべきかりを
あらぬをかたはしいたさまでかずまへのゝ後もまて
れがかへりていまばゆくさへなん。かずなしぬ身の
さすがにきしぬも世れさくこゝも。いとゝうしく
つましくおもふゐへらるゝを。何ゝなるさき後ゝ
もてかくされなりつゝのことそと思しゐへど。その(源河)
れゝあるは。何の心ざしかはあらん。ゝゝこの(眼表)れあり

さ夜をうちそひてもえゝなしぬおぼつかなさに
ゆづりきこしえしらくなめりそれもまたさりもちて
けちえんにあどおしぬれもてなしどもにまろ河の
ことなれめまめやすくなれどいとなんおもひなく
うきしさちなさことにてもれ心えてひがく
しさひとはこちまじらふにつけて人のこめさん
りしさことありしさてなをしでなく誰も抱し給
めれば心やすくなんとの給につけてもさりやうく
こそひがしにそれなどおもひ川ぐけこまふ墓へ
けうり給ぬさこもいとやんごとなされ心ざしのこ
まさるめるかれげにまた人よりことにうくしも

ぐしたへるありさ海のごとくこゝろうつまん〳〵ふか
くそゝぞうけれ。宮(女三)のれう(源ノ)さうべのれうしげさ
のこゝめでたくて。つゝりぬるともえあれめあくざ
りつい。かくしげあるさわざあり。おもし(女三と紫ノ)すぢ
まにおりすれど。つま一こゝろ心ざしくとしあり
こぞら宮を給はつけても。うすくをはつとしけ
らぞ菜し給けつやんごとなきさまおぼせさ海にも
あしざめ世に。あしてうちましるべきおぼしう
あしよ○ふずんで今いうしのこそしまあしいらで
紀らしこのりよくる(入道ノ手)つやまずをせひやうのこぞ
哀にあはつかなき。尼になもうくずかくちれそのよくれ

まさてとやうなりしひとことをけるのこて後の
世をせひやりつゝなぐめねゑへり大ゐ(タム)の君も此姫(女三)
家のれことをせひをよぐぬるしもあしぎりし
うぐめにちくおりしますをいとこゝにもおぼ
えず大うこのれりしづさに聞けて(女三八之)こなるこは
さりぬべきなりくに家りなれなれづらけいひ
有様もミ字絵にいとつくおほときゑへ一まぢ
まてうへのぎしさいいめしく世のこゝしに志聞
ぢりもてうしづさなりゑへれどおさくけぎや
うまもれかくいえしず女房などもおとなくし
きハすくなくつゝやかなりうちびとれひこ

かつはうちとけずやござれば、めづらかにゆゝしおほくぞ
ましぬまでつどひさわぎつ、地こひあげなる
れあくりとはいひなずし、おすがしものどやうな
心さびしめぐるはつろのうちのおしはしとこえぬ
わざなれば、まづ人まれぬさびさびしくんもまさ
さしはこちゆさげなど、こゆりなすらべきらし
もうちまずれば、くの人はひかれて、おほなし
けさひまであしはあずしかうねぞ、く月くれは、
いそげくられえあそびさふれは心つれくるしべ
のあつさ夜あずく、院ぶいのとめはつずえみふとくも
あれど、ひとつさ夜は世中をおぼしの絵まめれ

ぶごなれバかくりかくをもまうをてさしそてもあら
まほしかしめとおしろじゆるしのくいましめ
とくのへさを給ひず。さうじこのれありさ庵ぢり
をばいとよくをしへきてくれまずうしもてつけ
ぬくりかやうのことに紙ちねの表もげまこそ有がるさ
せなりかれば雲のれよういはしこされこうらのさし
へぬれど。さもかくももりいでえし罪ある所なく。
ちげやかなる紙もさしてさすがに心うのくしう
人をもけさず身をもやんごとなく心まくもて
なしそへぬくることさこしおもかげも云がるへ
のこなん。さひ出されけり。ワがれ小方も衰とおぼせ

まこそあるかれいかゝひありもしがれこそらうく
志さなどもれ志給はぬ人なりをぐしき物に今はと
めなるに心ゆるびて れかくさ夜ぐてりけどひ
ゆへるれありさ夜どもれどりぐにありしさをこゝろ
ひとけに忘れなれがこゝ候ましてけ宴(女三)ハ人志れ
ほどをもふにも限なく心ことなるれほどにとり
けきこゝろれかしこさにしもあらず人めれかざりづりに
こそとゝなりしるに けざとおほけなき心にしも
あらねどゝなるおりありなんやと床志くもひ寄し
給かり悲(拍子地)のんのきこも院(六条ノ)につゐに氣(まいり)志るさしく
さふしいなれ給し人なれば此宴(女三)をちくこ(朱)うどの

しづきあがめなりしれうろをきてなどくは
しくうなり（拍ノ）をきて、ざ海ぐのれきぶめありし
比ほひより罪（拍ノ）より、院（朱）よもめざ海しとゝ知ばし
のゝ海をせずと罪しを、かくことざ海ゝりなり給
へるハいと（拍ム）口おしくむまいうきこゝちまれば、なを
えさひをなれず、そのなりよりかゝひつきまそり。
女三ノ 女房のゝよりは、れ有様なども罪つゝかるを、なぐ
さめまさつぞよりなりけり。ふのうへ（紫）のれけを
ひまは、なほをされ（女三ノ）のてなんと世ノ人もまゐびけ
ゝかるをきていかゝじけなくともさりもれを
ふしをなしざしまし。げまこゝひなきれ男にこそ

あるらざるめとつねにこの小侍従といふにちめし
ともいひまげまして世中さぶめるまをおとゞの恵
もとより得いありて（源ノ世をそむき法ゝんとあるを）おほしをさてくるうこ。とも
ひさ給ひてどとさゆゑなく思ひありきけるに（地）三月
だうりの雲うらうらなる日六条院に（演）兵部の宮（柏）悲嘆
など（ゑう）来のへり（源）おとゞ出ゐて此物語などし給（河ゞ）輪
なるすまゐは。このぞこそいとつれぐにまぎるゝ
ことなりそれおほやけはたくしにとなしや。何
ぞしてかはらしすべきなどのゐひて。けさ（々）大将の
もれしつるはいづ方にぞ。いとさうぐしき紙。
例のこゆゑいさをてこうべうりけり。このむめな

ひうらぶれもこしつる紙ねるういでやしぬると
とまを給 夕 大ねの志いうしうらのまちよ人ぐあまる
して まりもてあそびしてこ給と 源ノ さうしめして
源 こぐりがちしきことのさすがよめさめてうどく
志きぞうしいづくこちるよとて此をうそこあれば
夕ノ 氣りぬくり 若 ワク 志 きんぐち 進めく人ぐ 源 ぬりぬり 源 まりもる
せぬくりやこれくゝ拙しつるとのるましふ 夕 これ
かれ詩りの 源 こちるへまかぞんやとの給て 夕三ノ 志ん 殿志
ひんがしおもて 明石姫 さりつぶもひうこやぐし 出りて 氣
給ましけなれば こちるいかくろへこりかう やつ水
などのゆきあひまちれてよしあるうりの時ど紙

ぢゐてたちいづ。如何さ如何いとおく。君遊。弘、弁。
兵衛佐。大夫の君など。なしたるも又かたなりなるも
さ面ぐに。人よりまさりてこのこ抱しおふ。やうく
誉ゆるに。かぎ知らず。かしこき目なりとけしぢて。
弁、君もえしづめず立まじれば。如とぐ弁皮も元如さ
めあへざめるを。二遊ゆなりともつき湧府げりさ
たちはなどかこぞれ給はざらん。かぞうりのよろひ
まてはあやしくこなす。口おしく如何しつぎ
なり。さるはいとをやうくなりや。このことのさ面
かなどのたまふに。大将も白の君もこれなりおて。
えなしぬられのげにさ面よひおふ。夕ぐんいと

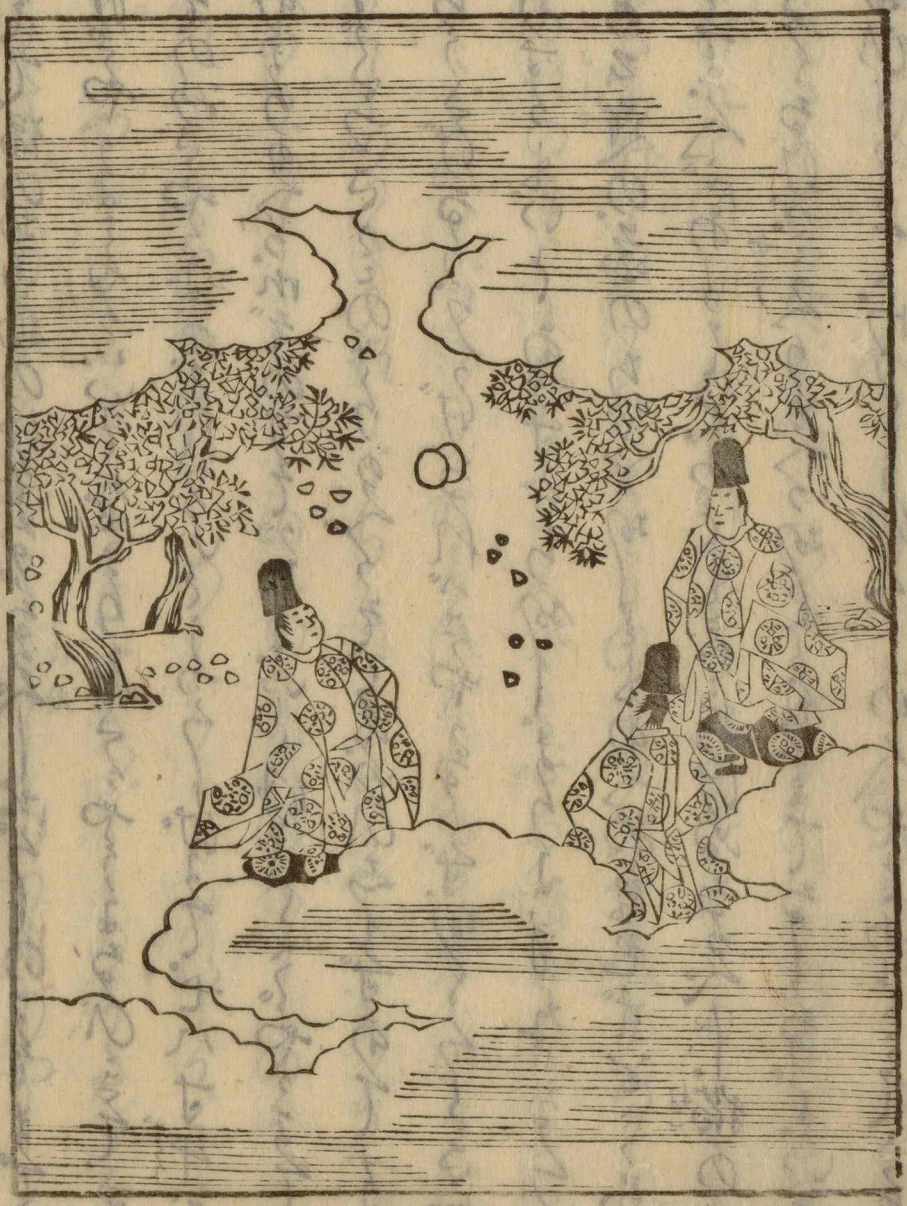
きよげなり。おさくさ海よく。志げかなしぬ。こゝぞれ
ごとなめれど。所から人がしなりなり。ゆへあるか。庵乃
本立のいとくかすこゝめるるに。女々のひもとき
ひとる笠の木ぜ。つづかなるもえ。きのかげなり。うく
もうなきことなれど。よきあしきけぢ先ある紙
いぢこゝて。紙もをとらしじとしひがれなる中なり。
柄
東の鐘のかりそめにうちまぎりぬへなあしもとに。
なしぶ人なりそりかたちいときよげにぢ海めき
たるさ海志たる人の手さいたくして。さすがなり
こゝぞりがもしきおりしくこゝ也。こゝもしのまゝある
れる様のかげにようて。人ぞもなれ。うへも志て心に

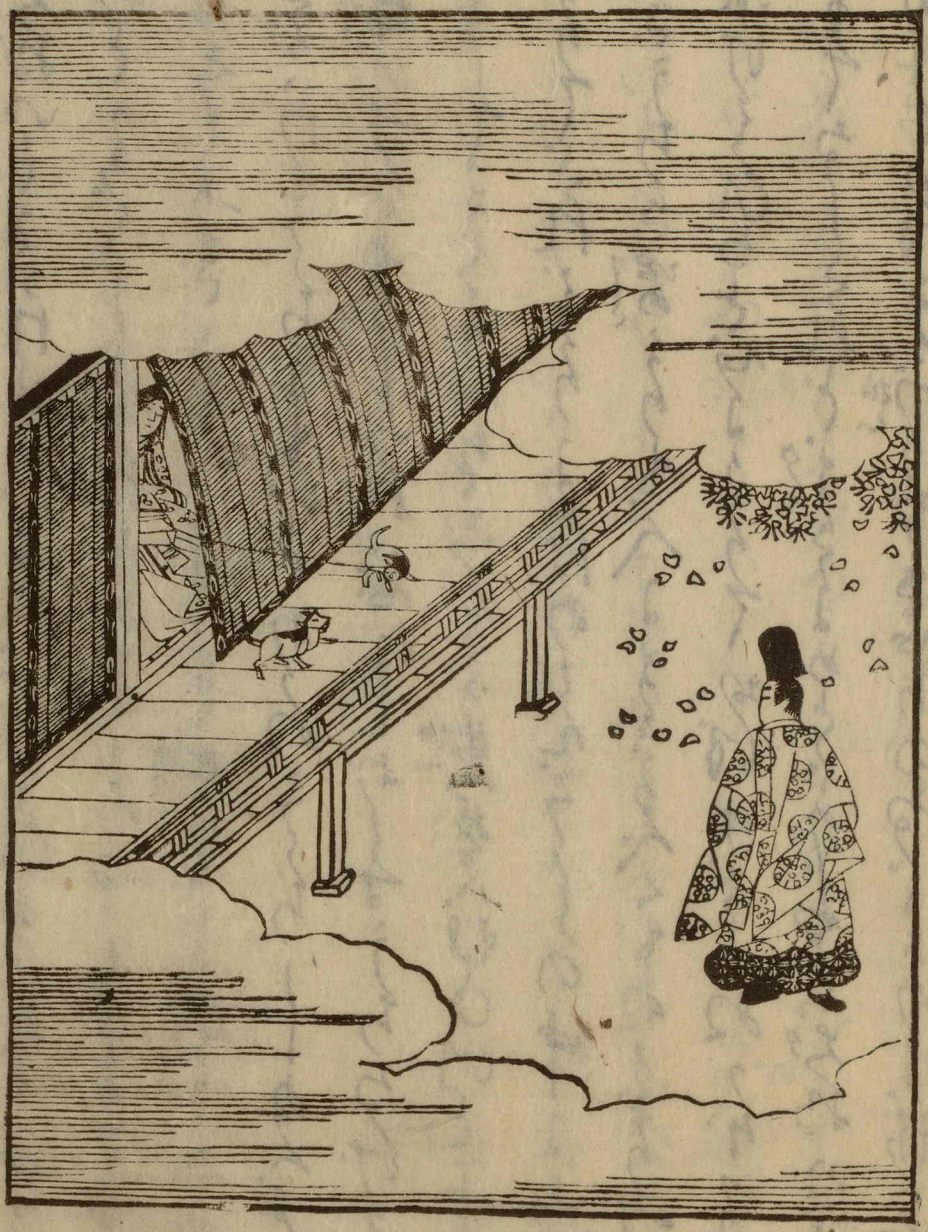
いれたるを、おとぐも宮もすこのうらんに出て、あら
んぞ、いとらうある心ぢんどもこえて、かぎおほく
なりゆくに、こらうもこぶれて、かうかりのひたい
すこしくけろぎたり、大内の君も、此位のほどおもふ
こそ、例ならぬこぶりがちしされとおぼゆれ、こる
めいんよりけにつくおりしげまて、櫻のちをしの
やくなへたるに、さしぬきれすそ、ひるすこし
ぬくこそ、氣色だりひきあげぬへり、かるぐ志くも
こそぎ、もれきこげなるうちとけすぐるなり、ちれ乃
ゆきのやうにふりかれだ、うちこあげて、志ほれ
たる枝すこしをしおりて、こもしのちかれ志れ乃

ほどにゐて。ゑもんのかみつゞきて。花みだりがはしく
ちるめりや。さくらはよぎてこそなどのたまひつゝ。
宮の御前のかたをしりめにみれば。れいのことに
をさまらぬけはひどもして。いろ〳〵こぼれ出たるみすの
つま。すきかげなど。はるのたむけのぬさぶくろ
にやとおぼゆ。御几帳どもしどけなくひきやりつゝ。
人げちかくよづきてぞみゆるに。から猫のいとちいさく
をかしげなるを。すこしおほきなる猫のおひ
つゞきて。俄にみすのつまよりはしり出るに。人〴〵
おびえさわぎて。そよ〳〵とみじろきさまよふ
けはひども。きぬのおとなひ。みゝかしましき心ちす。

猫(ねこ)はうぶよく人にもなつかぬにや。つないとながく
つさゝりけるを。もれにひさけまけもれるなるを
まげ(ねこ)んとひろしろふ程に。こすれそぞいとあしもる
ひきあげられたるを。とゝにひきなを寸人もなし。
この程(ちしら)のもとにありつる人ども。心あはたゝしげ
にて。もれをぢ志たるけるひどもなり。其下のきは
すこしいりたる程に。うちきすがたにてたちぬ人の
人(十三)ありもしよりましの二のまれひんがしのそば
なれば。まされ前もなくあしもとにいれたる。こう
ばいにやあらん。こさうすき。すきぐにあまたさかさ
なりたるけぢめ。もるやうに。(刃紙)さうしのつまのやうに

えて。猶のおり抽のほそながなるべし。此ぐしのすそまで
けざやかまこゆかハいとをよりかけたるやうまなびさて。す
そのふさやかまそがれたるいとうつくしげまて。七八寸汁(ざうり)ぞ
あまりのへる。此ぞのすそがちまいとほそくさゞやかまて。
すぐこつさかこのかりのへるそぞめいひしらずあてり
らうたげなり。夕かげなれバさやかなるしずかくらしさ心
ちすかもいとあかずくちおし。まりまゆをなぐる
あ云遊の。蓋のちかをおしこもあへぬ気色だをこゝ
とて。人ごあしたをふともえこうけぬなるべし。猫(ねこ)のい
たくなけバ。こゝ(女三ノ)へりのへるおもとち。もてなしなどいと
おひらかまて。ひくうけくしの人やとふとこしたり





大ねいとうはしいさかれど、ちひらんも中々
いとうぐしかれば、こゝろをえさせて、う
ちきもぶさこまへかりぞ、やをしひさ入給。
さうハワがこちまも、いとあるぬこちしぬへど、
猫のつなゆるしつれば、心まもあらずうちなげる。
ましてさぞかり心をきめたる楽の巻ハむ〇川とふる
かりて、これぞかりまはあらん、こゝしの中まきる
きうちき湯よりも、人まぎるべくもあらざりつる
れけるひなど、心まかりてあばゆ、さらぬかかり
もてなしこれど、まさまめとゞめじやと、大ねいと
おしくあばさる、ワりなき心ちのなぐさめに、孫二段

まつきよをて、かきいぐさこれが、いとかうだしらて、
らうこげまうちなくもおろしくせひよそへらるぞ、
すきぐしきや、おとぐ(涼)ばらんじなるをて、上(詞)ぎ
のざいとかろぐしや、こなるこそとて、基乃
こなるおもてまいりぬへれば、これそなるに氣(まいり)給ぬ、
家(営)もねなをりなて、此物語しなふ、つぎくの女ぞ
べは、すれこるはしうぶめして、はぎとなく、川(核餅)ぞい
もちねなし(梨)かうし(村子)じやうのものども、さ雨ぐり、
たこのふるだまとりまぎつあるを、はうき人ぞそ
ばれとりくふ、さるべきかしものだらりして、此
うちらけまいる、来(拍ん)の物をいといくせひしありて、

やしもすればたゞなれまゐりめをつけて。なぐめやる。
大(タん)拍は心ありまゐ。おやしかりけるまゐすれすきうげ。
ちひ(柏ノ)出ることやあらんとも給。いと(女三ノ)もしぢゝなりつゝ
有様をかけいかろ〳〵しとしつゝんかし。いでや
こなる(生ノ子)のけありさ夜のさはあるまじかめる物をと。
おもふまゝかれいこそ世のおぼしの程よりも。うち(女三ノ)
うちのけ心ざしぬるきやうまはありかれとしひ
あいきて。程うちとの用さ(ようい)おほかしず。いまけなきは
らうこきやうなれど。うしろめたきやうなりやと
しひおとさる。かん(柏ん)の君はよろげのけしをもおさ
おさゝめどしれず。おぼしぬ物のひまよりほのうまも。

それとこまりつゝまも我音（ヨグひり）よりの心ざしのまゝしあゝ
べきまやと契（ちぎり）うれしき心ちして、あゝぎのこゝ元也。
院（源）は音抽絵しいでゝひて、おゆき（詞は）おとゞのよろ川の
ことまゝちなしびて、うちまけのさゞめし給し
中ま、まりなんえをまぎぎなりまし、ちなきことは
つゝへあゝまじかれど、抽のすぢもなをこまなり
かりいとめもをまいぎ、かしこうこそ見てつれと
のゝへば、うち（柏）ゆゝ見えて、たゞ（詞）ぐしきかゝまは
ぬるく侍る、家のうぎのさしも唱つゝへ侍らんり。
後の世のこめことなることなくこそ侍ぬべかれと。
卜ゝへば、いゝで（源詞）ゝ何ぞもへまことなるけぢめ

をば、しつゝふべきなり。家のつゝへなどなり。
うきとゞめいれたんこそ、けうはあらぬなどこそ
ふれ給。ばさ風のもひやうにきらきなるをこゝ
まもうろ人(拍心)にならひて、いかゞらのことにか心を
うつす人はもれし給はん。何ぞまつけてか、衣(廿三ノ)と
こゆるしぬふだらりはなびかしきこゝゆべきこと。せひ
めぐらすに、いとこよなくばあたりたるかなるべき
男のほどにも、せひしらるれば、ひとのこゝろがりて
まうでぬぬ。大(夕)将来ひとの車にて、君の程抛し
ぬふ。なる紙(拍詞)此此のつれぐまは、此院(係)に乗りて、まぎら
はすべきなりなり。かふれやうなるんいとまれひま

まちつけて。菊のありすぐさずまいれとの(源)給つるを。
其おしみかでし。月のうちにこちまゐをて。あり
ゐへとうらひちぞうをのくけるゝ。君の程の
物ぞしぬつて。家(女三)の(柏ム)此とのあをいまはしれ。
院(源)(柏詞)はれこの基(女三)にのみ物をさせ給ちあり。あれ
此花のことなるなりかし。この家(女三)いかりおぼ
すらん。そうどのなるべなくなりしまり給へるに。
さしまあらで。ふし給ふるらんこそ心ぐるしけれと。
あいなくいへば。夕(夕詞)いぐしきことゝいでうさは
あらん。こなる(塗ノ事)をさ夜かりて。おかしくてゐへる
ひつびのかぢめぢうりにこそあべかめれ。家(女三)をば

うるぐまつけて。いとやんごとなく。おもひきこえ
ぬへうもれをとうたりぬへぞ。いで（柏詞）あるうは。こまへ。
これ男て侍り。いとくおしげるうおりくあるう
をや。さうは世まをしなべこゝぬ人のはおぼしを。
ありがたきわざなりやと。いとおしがう
いかなれば（柏）菊まあづこふ鶯の様をかてねぐら
とはをぬ。長（詞）の鳥のさくらひとりまとまゝぬこゝろ
よ。おやしとおぼゆうことぞうしと。口ずさひまいへば。いで（タ詞）
あるかあぢきなれ抱あつうひや。されどこゝとしふ
（タ）花山ぶまねぐらさぶむうもてどりもいでゝ
ちるれ多まあくべき。わり（詞）なきこと。ひこをもむこさる

のこやまとゝいふて。ワづらひしかれば。ことまいまとゞ
ぬ。ことゝまいひまぎらひしてをのくわれぬ。かんの
君は。れはいとのひろゞの基に。独ずまてぞ。れし
給けり。せふ心ありて。年代かうすまねをすゝに。人やりな
らずさうぐしく。心ばそきありくあれど。我身かが
りにて。おどかせふるかなはざらんとのこ。心をぞり
すゝに。此夕べよりくしいふく。抽せましくて。いかなら
んありに。まゝさばかりにても。ほのかなる。此有さ間を
ごにこん。ともかくもかきまぎれらるきもの人こそか
ぎそめにもこまやすき抽いこゝろ。ゆゞへのうけろ
ひもかろぐしきに。をのづからともかく。もの。陳を

うらぐひ川くらやうもあれなど。たひやううなくふう
きまどの内に。何ぞうりのことまつけてかわくふうき心
をうりとぐまちしをまるべきと。むひいくいぶをうれば。
小侍従がり。例のふみやりぬて。一日（文ノ詞）のうぞまさそられて。
そうきのちしをまけいりてもべしに。いとぐいうに。そおと
し給へん。その夕（ゆふべ）より。そぐり心ちうきくしし。
おやなくうふをなぐめくしもべうなどうきて
（拍）よそにまいておしぬなげきはしげれば名称慈
しき恋のゆふげ。とあれど。侍従を一日の心を
しらひば。（侍従ハ）こぐよれつひのなぐめにまいてもとおもふ。
おまへに人しげうしぬほどなれば。此文をもて来りて。

この人(羽)のうくのゝ。忘ぬ物まことゝひ物し給こそ。
まづこゝしく侍れ。心ぐるしげなる有様も。こゝ女人
あまり心もやそひ侍らんと。弟づくのころながら。
しりがくなんと。うちつゝひてきゝゆれど。いと(女三羽)
うゝてあることをもいふかなと。何ごろもなげ
のゆゑて。ふゝひろげゝるを。はしんどく。ふ(ん)もきぬと
いひゝる所をおさましりしゝ。それつまをおぼ
しあはせゝるゝに。はおもてあるゝて。お(源)とゞの
さぶらりことのついでごとに。ちね(タ)まこしゝまふな。
いまけなきはを。猶なめれど。なれげゝさりもづ
して。こゝをりやうもありなんと。いましめ給ひ給

おぼし出るに、夕ぬのさうことありしとうり罪し
こうん時、つゝにあぢめ給いんと、ひとのこなりけん
ことをがおぼさで、先もぐかり罪しぬふ心のうちぞ
おさなかりけるつねよりもれさしいへなければ、
（後注）すきまじく、しぬてきゝ申べきことにもあらねば、
ひきまびて、例のうく、一日（文句）もつれなしがれを
なんめぎ面しうとゆうしこさしざりしを、こゝずも
あらぬやいるにあれかけくしやとぞやまうな
もしまがきて
（小後注）今さしまいろまないでそ山猿をよぢぬ枝に
うちかけきとがひなきことをとあり

69039
6 AP78